

# 開発こうほう

Hokkaido Development Association

共に北海道の未来を創る

August.2026

8月号

北海道新時代

「持続可能な地域コミュニティに向けて」

ー町内会活性化のヒントを探るー

シリーズ「北海道の地域を考える」

第2回 消える若い女性たち

シリーズ 北海道の博物館・郷土資料館

北海道開拓に寄与した樺戸集治監

地方創生

第3期浜頓別町まち・ひと・しごと創生総合戦略

ガストロノミックツーリズムin北海道

「留萌」

ほっかいどう学

化石の発見から博物館文化へのつながり



北海道遺産  
Hokkaido Heritage

『エメラルドグリーンの日』(『北海道遺産フォトコンテスト2022』応募作品)

撮影者 浅井 和恵 様  
北海道遺産 「積丹半島と神威岬」

積丹半島開発の歴史は古く、ニシン漁の旧大漁場として発達しました。切り立った断崖とシャコタンブルーと形容される神威岬の海岸美は絶景。貴重な自然と産業の古い歴史に加え、明治から昭和初期に栄えた旧ニシン場の遺構として番屋、揚場跡、袋漕、トンネル、旧街道などが保存されている。神威岬の全面禁煙など景観を保護する活動も始まっている。

## Contents

### 北海道新時代

#### シンポジウム

##### 「持続可能な地域コミュニティに向けて」

「一町内会活性化のヒントを探る」 ..... 1  
(一財) 北海道開発協会開発調査総合研究所

### 開発調査総合研究所 シリーズ「北海道の地域を考える」〈2〉

#### 北海道の人口問題の危機

##### 「地域の確かな将来に向けて考えたいこと」

第2回 消える若い女性たち ..... 9  
(一財) 北海道開発協会開発調査総合研究所

### 開発調査総合研究所 シリーズ 北海道の博物館・郷土資料館〈5〉

#### 北海道開拓に寄与した樺戸集治監

月形樺戸博物館 ..... 13  
野本 和宏

### 寄稿

#### 北海道の開発と鉄道ー1世紀半の軌跡ー <上>

石炭輸送から「千マイル」への道 ..... 15  
原田 伸一

### わが村は美しくー北海道 未来へつなぐ 第66回 ー滝上町ー

「香りの里」滝上町が誇る希少な和ハッカ栽培 ..... 19  
(株) 滝上町和ハッカ・ラボ

### すすきもものほっかいどうスケッチ 第56回

麦畑が噴火し、地表を押し上げ誕生した山 ..... 20  
すすき もも

### 地方創生

第3期浜頓別町まち・ひと・しごと創生総合戦略 ..... 22  
浜頓別町地方創生推進室

### ガストロノミックツーリズムin北海道

「食と文化の観点から地域を見つめ、北海道を学ぶ旅」 第12話  
「留萌」 ..... 26  
遊佐 順和

### 「ほっかいどう学」第57回

#### 化石の発見から博物館文化へのつながり

「サッポロクジラを例に」 ..... 30  
田中 嘉寛

### 地域おこし協力隊 第59回 ー夕張市ー

夕張で見つける新しい自分 ..... 34  
友成 佳奈

### 「活動報告レポート」ー標茶町ー

#### 「引退乗用馬預かり事業の健全な発展」と

「馬を架け橋とした地域振興」を目指す ..... 36  
特定非営利活動法人ホースタウンネットワーク

### お知らせ

令和8年度 地域活性化活動助成の選考結果 ..... 38

第39回 北海道スカイスポーツフェアin当麻 ..... 39

お知らせ ..... 40



## シンポジウム 「持続可能な地域コミュニティに向けて」 —町内会活性化のヒントを探る—

(一財) 北海道開発協会 開発調査総合研究所

当研究所が発足させた「北海道における地域コミュニティに関する研究会」では、地域社会において中核的な役割を担う町内会の現状分析や今後の方向性を検討するなど、これからの時代に求められる地域コミュニティのあり方について調査研究を進めてきました。このたび、3年間にわたる調査成果を報告書『持続可能な地域コミュニティづくりに向けた取り組み』として取りまとめたことから、その内容を広く発信する目的で、2026年3月17日(火)にシンポジウムを開催しました。シンポジウムでは、町内会が直面する諸課題や先進的な取り組み事例の報告に加え、持続可能なコミュニティ形成に向けた展望について、専門的な見地から活発な議論が交わされました。

### 事例報告「将来を見据えた町内会づくり」

西山 哲志 氏(新琴似三番中央第二町内会会長)

私たちの町内会は、昭和40年に117世帯が加入する「三番中央町内会」として産声を上げました。その後、人口急増による分立を経て、昭和60年に現在の「新琴似三番中央第二町内会(加入世帯521戸)」が誕生し、昨年4月、設立40周年という大きな節目を迎えました。



しかし、この記念すべき年に私たちが向き合ったのは、楽観視できない現実でした。2000年に1,200人を超えていた人口は1,000人を切り、一世帯あたりの人数も1.9人まで減少しています。単身世帯の増加と高齢化、そして担い手不足という深刻な課題に直面する中で、「今の活動は住民のニーズに合っているのか?」というズレを放置すれば、いつか組織そのものが立ち行かなくなるという強い危機感を抱いてきました。

当初、40周年の記念行事も検討されましたが、役員会で私はあえて「華やかなお祝いをする代わりに、5年、10年先も続いていく『持続可能な町内会』を再構築しませんか。これを40周年の記念事業にしましょう」と提案しました。この提案は役員の方々に快諾され、令和6年度の重点事業として動き出しました。まずは実態に合わせて専門部を再編し、役割を終えた部の整理と役員削減(4名減)を実現しました。

最大の課題である役員勧誘については、従来の慣習を根本から見直しました。これまで「仕事や子育てで忙しいだろう」と候補から外していた若い世代に目を向け、勧誘時期も厳冬期の2～3月から、対話しやすい「秋口」へと前倒ししたのです。事前に班長から情報を得て、若い世帯を中心に訪問したところ、驚くほど前向きな反応が返ってきました。「具体的に何をするのか?」「拘束時間はどのくらいか?」といった建設的な質問が飛び出し、「それなら協力できます」と快諾してくれる方が次々と現れたのです。

ただ、せっかく新しい風を迎え入れても、負担が重ければ長続きしません。そこで「属人化の解消」と「業務の分散」を徹底しました。例えば、衛生部のごみステーション点検を全役員での交代制にし、特定の部に集中していた負担を解消しました。また、形式的な定例会議を捨て、必要に応じて開催する運用に改めました。さらに、札幌市の補助金を活用してホームページを構築し、配布作業や印刷経費の削減に着手しました。現在は回覧板との併用期間ですが、着実な一歩を踏み出しています。

若手役員を迎える際は「一度に3人以上」というルールを意識しました。ベテランの中で孤立させず、同期という仲間をすることで、発言しやすい環境を整えるためです。私たちが「教える」のではなく、SNSの活用方法などを「教えてもらう」というスタンスを大切にしています。

住民アンケートでは、デジタル化への過渡期にある難しさも見えましたが、同時に「協力の意思がある」

方が半数に上ることもわかりました。

私の最終的な目標は、誰でも安心して運営に携われる「役員マニュアル」を完成させることです。「この通りに進めれば大丈夫」という安心感があれば、役員を引き受けるハードルはもっと下がります。

理想の形までは、まだ道半ばです。しかし、「限られた人数で、できることを精一杯やる」という原点に立ち返り、変化を恐れずに取り組むことで、今、確かな手応えを感じています。これからも、50周年、そしてその先へと続く活気ある町内会を、地域の皆さんと共に築いていきたいと考えています。

## 研究成果報告「持続可能な町内会のあり方について」

武岡 明子 氏（札幌大学地域共創学群教授）



町内会は不思議な組織です。民間の組織なのに、何らかの公的な組織だと思われている節もある。生きるために絶対必要という人もいれば、入らなくても全く困らないという人もいます。このような

二面性を持ち、毀誉褒貶の激しい組織は他にないと思います。今日は、この不思議な組織をいかに持続可能な形にしていけるかについてお話しします。

社会学者の鳥越皓之氏は、町内会の特徴に「全世帯加入制」や「行政の末端機構」など5つを挙げています。これらは自治体の特徴と相似しており、そのため町内会はしばしば「準自治体」とも呼ばれます。

その起源は明治期にまで遡りますが、近代化の過程で行政機関と町内会の役割分担は、きわめて曖昧なまま切り離されました。その結果、地域の公共サービスをどちらが担うかは、時代や状況によって「振り子」のように揺れ動いてきたのです。

私は行政学を専門としていますが、日高昭夫氏が指摘する町内会の「4つの機能」の中でも、特に注目したいのが「行政協力機能」です。実は「行政が民間を動員して行政活動に協力させる」という仕組みは、日本の行政運営の大きな特徴です。村松岐夫氏は、これを「最大動員のシステム」と表現しています。国政選挙の事務を自治体の選挙管理委員会が担うのと同様に、自治体は町内会を「動員」して広報誌配布や防犯

灯維持などのたくさんの事務を行わせています。行政学者の金井利之氏は、この住民のあり方を、自治体とともに公共サービスの提供を担う「公務住民」という言葉で表現しています。

この実態が顕著に表れるのが「家庭ごみ」の問題です。家庭ごみの収集は自治体の事務ですが、全国の自治体の9割以上が「ステーション方式」を採用しており、ごみステーションを管理しているのは、多くの場合、町内会です。つまり、町内会の協力なしには、自治体の仕事は成り立たないのが実情です。

しかし今、町内会は「第三の危機」にあります。戦後の解散命令（第一の危機）、1970年代の加入率低下とコミュニティの変容（第二の危機）を乗り越えてきましたが、現在は「担い手不足」と「高齢化」という深刻な構造的問題に直面しています。行政からの期待が膨らみ、「振り子」が振れる一方で、現場のキャパシティは限界を超え、各地から悲鳴が上がっています。

そこで私は、「ごみとりサイクル」を、町内会の役割を再認識してもらうための「仕掛け」に変えられないかと考えています。例えば、奈良県生駒市の「こみすて」\*1は、自治会館での資源回収をきっかけに、住民が交流する「暮らしの拠点」を創出しています。

これからの町内会が持続していくためには、2つの道筋があると考えます。地域の資産価値を守るため従来のフルセット型の活動を維持する「プランA」と、住民が本当に必要とする活動に絞り込み、今の生活に合わせサイズダウンする「プランB」です。

多くの地域では、この「プランB」への転換を前向きに選択する時期に来ているのではないのでしょうか。東京都港区の「お台場合同自治会」のように、会費も活動の義務もなく、リサイクル資源回収から得られた収入などの財源により運営しているユニークな例もあります。「負担がないから人が集まり、人が集まるから行政との交渉力が生まれる」という実利的な姿は、町内会の新しいあり方のひとつであると感じます。

一度解散した町内会を再結成するには、多大なエネルギーを要します。手遅れになる前に、今こそ自分たちにとっての「理想の姿」を模索する時ではないでしょうか。私は、町内会という組織が持つ底力を信じています。

\*1 「こみすて」と「コミュニティ」を掛けた造語。生駒市ポータルサイト「グッドサイクルいこま」(<https://goodcycleikoma.jp/>)に活動レポート掲載。

## 本研究会委員四氏によるパネルディスカッション 「これからの地域コミュニティのあり方について」

<コーディネーター>

武岡 明子 氏（札幌大学地域共創学群教授）

<パネリスト>

小内 純子 氏（札幌学院大学名誉教授）

林 琢也 氏（北海道大学大学院文学研究院准教授）

片山 めぐみ 氏（札幌市立大学デザイン学部准教授）

### テーマ1：町内会を中核とした地域コミュニティの意義、期待される役割について

武岡 町内会を地域コミュニティの中核とする考えは根強い一方で、加入率は低下し、若年層を中心にその必要性を問う声も増えています。しかし、この仕組みが消滅すれば、ごみ出しや防犯灯の維持といった「日常の当たり前」が崩れ、最終的に困るのは住民自身です。この既存の仕組みを重荷ではなく、現代に合わせていかに賢く活用していくかが重要です。

まずは、パネリストの皆さまに、「町内会を中核とする地域コミュニティ」の意義、そして今の時代に期待される役割について、お考えをお聞きます。

小内 地域社会学を専門とする私ですが、町内会の諸課題については、自らの実体験から語らざるを得ません。



1990年代半ば、札幌近郊の都市で約60戸規模の町内会に加入して30年。

加入当時は葬儀があれば町内会長が葬儀委員長を務め、班が総出で手伝うのが日常でした。行事も盛んで、当時はその「濃すぎる付き合い」を負担に感じることもありましたが、それが地域の当然の形でした。しかし今や、役員は1年任期の持ち回りとなり、構造的な課題は先送りされ、ポロポロと退会者が出る現状を前に、私は、このままでは解散に至るのではないかと強い危機感を持っています。

そんな中、研究会を通じて多くの地域を調査し感じたことは、町内会のあり方は地域ごとに多様ですが、決して変わることのない存在意義があるということです。例えば、私の住む地域でのパートナーシップ除排雪や

街路灯の維持、ごみ収集所の管理は、町内会という組織がなければ行政との連携が断たれてしまう「生活維持のための最低限のインフラ」となっています。たとえ会員が減ったとしても、退会者に一定の費用負担を求めるなど、残った会員だけで負担を背負わない工夫をしながら、この機能を守っていく必要があると思います。

そして何より「そこに共に住んでいる」という事実は、他の組織には代えがたい固有の意味を持ちます。高齢化が進み、災害への備えが急務となる今、リスクに対応するには物理的に隣り合う者同士のつながり、すなわちセーフティネットとしての町内会です。この機能をいかに継続させるか。私自身、一住民として真剣に考えていきたいと思っています。

林 地理学の視点に立てば、場所や住民の属性が異なれば、その土地ならではの「地域の回し方」も当然に多様であるはずですが。地域コミュニティの維持を考える際、その受け皿を必ずしも町内会という既存の枠組みだけに収めさせる必要はないのではないかと。これが私の基本的な考え方です。

もちろん、地縁組織の核である町内会の役割は重要ですが、担い手不足が深刻な現代では、志ある有志やNPOなどの多様な主体がその役割を分担し、共創していく選択肢も十分にあり得るでしょう。

岐阜県郡上市和良町の例を紹介します。ここでは過疎化に直面する中で、都市部へ出た「他出子（元住民）」を巻き込み、コミュニティの「内」と「外」を繋ぐ活動が企画・実施されました。他出子の子どもに祭りの舞子として参加してもらったり、集落内の住民同士の結束や交流を深めたりするためのサロン活動などです。これらは、対処療法に過ぎないかもしれませんが、住民一人ひとりが地域課題を「自分事」として捉え直すきっかけとなります。

私は決して町内会を否定するわけではありません。ただ、その場所に応じた多様な主体が連携する形に、現代におけるコミュニティの意義があると考えます。「やり方の多様性」を認める視点こそが、持続可能な地域づくりには不可欠だと思います。

片山 私の専門はコミュニティデザインです。学生たちと取り組んでいる「コミュニティマルシェ八百カフェ」\*2を紹介します。5年前に学生の企画から始まっ

\*2 八百カフェ学生実行委員会、コミュニティマルシェ八百カフェ、<https://yaocafe.jp>

たこのマルシェは、今や日曜日の午前中に400人近くが集う場へと成長しました。

最大の特徴は「出店ハードルの低さ」です。売上の5%を納めるだけで、誰でも自分の特技を試すことができます。例えば、不登校だったある中学生は、編み物作品の販売を通じて3時間に2万円を売り上げ、大きな自信を手に入れました。高校生になった今は、喫茶店に自身のコーナーを持つまでになっています。また、趣味でお茶を振る舞っていたご夫婦が高齢者向け講座を依頼したところ、新たな役割を喜んで引き受けてくれました。大切なのは、個人の「自発性」を見出し、そこにふさわしい「役割」をそっと投げかけていくプロセスです。

運営の持続性についても、重要な知見が得られました。学生の分析によれば、「自己実現（やりたいこと）」と「義務（運営の仕事）」をメニュー化して紐づけることで、メンバーの意識が変わり、面倒な事務作業も「自分の目的のため」という自律的な動きへと変化しました。

コミュニティデザインの本質は、人々の営みを観察し、「個人の得意」と「組織の義務」をうまく組み合わせることにあります。運営者がガチガチに管理しなくても、この組み合わせさえ機能すれば、場は自ずと回り始めます。こうしたボランティアベースの繋がりを編み出す手法は、町内会活動をはじめ、あらゆる地域活動に活かせるはずです。

**武岡** 林先生にお聞きします。和良町の集落づくりは、こういった問題点や難しさがありましたか。



**林** 和良町では、自治会長を輪番制や充て職といった形で運用しています。本来、外部の人材や地域づくり団体との連携は、地域課題を解決するための有力な「手段」であったはずですが、しかし、

自治会長が交代する際、前任者から「なぜこれをしているのか」という背景や志が十分に継承されないと、「主客転倒」が起こってしまいます。

新しく就任した自治会長からすると、外部との協働が「自分たちのための活動」ではなく、「連携先から押し付けられた面倒な仕事」のように映ってしまうわ

けです。こうなると、本来自分たちが主役であるはずの地域づくりへの意欲（モチベーション）が、いつの間にか、強い「やらされ感」へと変質してしまいます。

地域を維持するために外の力も活用するという「処方箋」が、引き継ぎの不備によって、現場の負担感という副作用を生んでしまう。この「志をいかに組織の記憶として定着させるか」という問いは、場所を問わず、現代の地域コミュニティが抱える深刻な問題と言えます。

**武岡** 小内先生は、今後は弱体化した町内会と弱体化した自治体が協力していかなければならないと提言されています。町内会と行政のこれからの関わりについて、改めて先生のお考えをお聞かせください。

**小内** 武岡先生のご報告にもある通り、町内会は長らく行政の「下請け機関」としての性格を強く持っていました。1990年代後半から「協働」という概念が浸透し、行政側も市民の声に配慮する形へ変化しつつありますが、旧来の「押し付け・押し付けられ」の関係を脱し、対等な立場で歩む姿勢が不可欠です。

その一方で、行政側の3分の1が「依頼事項の見直し」の必要性を感じていないというデータがあり、現場との認識の乖離は依然として深刻です。西山会長のご報告にあった「役員負担の徹底的な検証」は、まさにこの乖離を埋める突破口となるはずです。

私自身、町内会の総務として「配布物を一度にまとめてくれば、回覧も一度で済むのに」と痛感した経験があります。こうした現場に対する「小さな思いやり」の欠如が、結果として大きな負担感を生んでいるのです。単位町内会レベルであっても、内部で検証した「具体的な不便」をもっと行政にぶつけ、改善を要望していくべきではないでしょうか。

また、町内会が弱体化する一方で、行政もまた定員削減などで余裕を失っています。お互いに手を取り合いたくても、動ける「人員」がいないという深刻なジレンマに陥っているのが現状です。ここでヒントになるのが、鷹栖町の事例です。小学校区単位の地域運営組織に、地域おこし協力隊や集落支援員といった「外部の若いパワー」を配置したことで、低迷していた会館運営が活性化したといえます。行政も町内会も人員が不足する今だからこそ、外部の力を積極的に取り入

れ、行政と協力してその活動を支えていく。こうした「新しい風」を地域側から積極的に要望していくことが、これからの持続可能な地域運営には欠かせない戦略になると考えています。

**武岡** 片山先生は報告書の中で、「縁側町内会」という非常に魅力的な事例を挙げられています。ぜひ詳しくお聞かせください。

**片山** 北海道ではなかなか見かけなくなった「縁側」という風景を、少し想像してみてください。

目の前に広がる畑や庭、そこには靴を脱がずにふらりと腰掛けられる縁側があります。座布団の上では猫が丸くなり、「こんにちは」と声をかければ奥からお茶が出てくる。お茶を飲みながら話すうちに、つい日頃の悩みや愚痴がこぼれてしまう。そして一週間後、また自然とそこに足が向いている…。そんな空間そのものが、人の温かな交流を引き出しているのだと感じます。私は、町内会もそんな「縁側」のような存在であってほしいと願っています。



特別なイベントがなくても立ち寄れる場。子どもたちが遊び、高齢者が日向ぼっこをしながらそれを見守る。そんな「<sup>しづら</sup>設え」があるだけで、地域の関係性は確実に育まれていきます。

今、社会福祉や医療の現場でも、こうした場へのアクセス、いわゆる「アウトリーチ」<sup>\*3</sup>が求められています。私たちのマルシェでも、看護学部の先生や医師による健康相談が、いつの間にか深い人生相談に変わる光景がありました。場を作ることで、運営側の意図を超えた豊かな営みが引き出されていく。これこそが、私の提案する「縁側町内会」の形です。

私はこれを理想で終わらせず、この4月から具体的に動き出します。舞台は南区の「保養センター駒岡」です。ここの素晴らしい庭園と茶室をお借りし、フリースクールの子どもたちと高齢者が共に過ごす「共生のまちづくり」の実験室を作ります。興味のある方はぜひ声をかけてください。私の失敗や成功体験の中から、ヒントをたっぷりとお裾分けできるはずですから。

## テーマ2：地域コミュニティ活性化に向けた取り組み

**武岡** これまでの町内会は、あまりにも多くの役割を背負いすぎていたのかもしれませんが。これからの地域運営を考える上で、私が大切だと考えているキーワードは「ゆるやかなつながり」です。

それは義務や負担で縛るものではなく、先ほど話題に出た「縁側」のように、ふと立ち寄れる心地良い距離感のこと。この「ゆるやかさ」の中にこそ、持続可能なコミュニティを作る鍵があると感じています。そこで、パネリストの皆さまのご専門の立場から、具体的なアイデアを伺いたいと思います。

**小内** 報告書で挙げた5点のうち、特に重要な3つの視点に絞ってお話します。

一つ目は、「男性中心・世帯中心」の仕組みからの脱却です。地方を去る若い女性たちの本音に耳を傾けると、「行事では男性がお酒を飲み、女性は裏方で炊き出しばかり。ここに自分の未来はない」と絶望する厳しい現実があります。属性で役割を決めるのではなく、一人ひとりが個人の能力を発揮できる体制を、意識的に作る必要があります。私が研究したスウェーデンの「ピアラッグ」という町内会によく似た組織では、投票権が世帯ではなく「個人」にあり、15、16歳の高校生から地域の正式なメンバーとして認められています。若い世代を単なる「お手伝い」ではなく「対等な担い手」として迎える姿勢は、これからの日本の地域づくりにきわめて重要な示唆を与えてくれます。

二つ目は、特定の誰かに依存しない仕組みづくりです。担い手不足に直面すると、特定のリーダーや外部人材に負担が集中しがちです。しかし、過度な依存はその人の退任やトラブルを機に、活動が以前より後退してしまうケースを、私は見てきました。行政や外部人材はあくまで「つなぎ役」に過ぎません。住民も行政も、それぞれが「自分ごと」として自立し、役割を果たしていく。この適度な距離感とバランスこそが、活動を長続きさせる秘訣です。

三つ目は、デジタル化への積極的な挑戦です。10年後を見据えれば、スマホを使いこなす世代が確実に地域の中核となります。私自身の経験からも、冬場の回覧板回しや集金といった業務負担は、デジタルを活用することで大幅に軽減できます。デジタル化は一見「冷

<sup>\*3</sup> 福祉や医療の分野では、施設や病院から地域に出て、当事者や患者のところで活動することを意味する。

たい」と捉えられがちですが、ある難病を抱える女性は「ネットだけが社会との唯一のつながり」だと語っていました。LINE一通で安否を確認し、瞬時に情報共有ができる。デジタル化は単なる効率化の手段ではなく、孤立を防ぐための「温かなセーフティネット」になる可能性を持っていると思います。

**林** 報告書でも触れた通り、苫小牧市には高校生が町内会役員を務める事例があります。15、16歳という若さで地域運営に参画し、卒業後もOB・OGとして関わり続ける仕組みは、まさに「次世代への循環」を生み出す大きな希望と言えます。

他方で、いくつかの現場を調査していると、もう一つの深刻な問題に突き当たります。それは「キーマンの成長や能力の獲得が、住民の主体性を奪ってしまう」という逆説的な構造です。当初は「自分たちの力で解決しよう」と始まった活動でも、5年、10年と月日が流れ、特定のリーダー（キーマン）の実行力が向上すると、周囲は「あの人に任せれば大丈夫」と当事者意識を減退させてしまうことがあります。本来、住民自治を育むための取り組みが、皮肉にも「一人の主役と大勢の傍観者」という構造を生み出してしまうのです。

「次は〇〇さんの後継者を育てなきゃね」と他人事のように語る周囲に対し、「あなた自身はどう関わるのか」という問いは立ち消えてしまう。このリーダーへの無意識の依存というリスクは、むしろ活動が成功している地域ほど内包されているものです。一度「観客席」に座った住民を再び「舞台」へと引き戻すには、単なる活動の継続だけでは不十分です。役割を定期的にシャッフルする、あるいはリーダーがあえて「できないこと」をさらけ出すといった、意図的な仕掛けが必要なのかもしれません。現場で直面するこの「キーマン問題」こそが、住民自治の持続可能性を問う、大きな壁であると感じています。

**片山** 先の「縁側町内会」は、単に物理的な設えをすることだけが目的ではありません。特定の機能に縛られず、多様な活動を受け入れる「自由な空気感」を持つ場をイメージしてほしい、という提案でした。

その具体的な実践の一つとして紹介したいのが、報告書で挙げた「とくいの銀行」\*4です。茨城県取手市から始まり、北海道白老町や札幌国際芸術祭でも実績

を重ねてきた、10年以上続く仕組みです。

仕組みはいたってシンプルです。住民が自分の「得意なこと」を掲示板に貼り出し、それを見た人は、その得意を銀行の預金のように「引き出す」ことができます。面白いのは本物の銀行のような「通帳」が存在することです。「誰のどんな得意を引き出したか」「自分の得意が誰かに使われたか」が、交流の履歴として通帳に記録されていきます。

ここで重要なのは、「得意」のハードルをうんと低く設定することです。「消しゴムはんこが作れる」「スマホの使い方を教えられる」…。こうした何気ない得意が可視化されることで、地域で「助けて」と言い合える心のハードルが、ぐっと低くなります。同時に、地域に眠る多様な人材資源を掘り起こす「装置」にもなるのです。

私はこれから、この仕組みの導入を目指します。子どもたちの得意を高齢者に頼ってもらったり、逆に高齢者の知恵を子どもたちが「教えて」と引き出したりする。そんな世代を超えた「とくいの交換」を通じて、地域のつながりをもう一度、丁寧に編み直していきたいのです。町内会の新しい「回し方」の一つとして、皆さんの地域でも検討してみたいかと思いますが。

**武岡** 先生方のお話に共通していた「人材」、特に女性や若者の力をどう引き出すかという視点は、これからの地域づくりにおいてきわめて重要な示唆を含んでいます。

さて、ここからはさらに踏み込んで、いわゆる「実装面」について掘り下げてみたいと思います。実際に取り組みされる中で見えてきた、確かな手応えを感じた成功事例、あるいは逆に直面した壁などの経験談をお聞かせください。

**林** 和良町でも、「とくいの銀行」に通じるような現象が散見されます。注目すべきは、移住してきた30～40歳代の現役世代の男性たちが、自分の「普段の仕事の延長」で地域に貢献する活動を行った点です。

例えば、元通信会社勤務の方が高齢者向けのスマホ教室を開いたり、公務員として福祉系の部署で働いている方が認知症の勉強会を開催したりといった動きです。これまでの町内会運営では、定年退職者に充て職として役員を依頼し、一から仕事を覚えてもらうのが

\* 4 とくいの銀行、とくいの銀行井野本店、<https://www.tokuinobank.net>

一般的でしたが、現役世代に同様の負担を強いるのは、時間的にも精神的にも難しい面も多いのが実情です。

その点、彼らが「培ってきたスキル」をそのまま提供する形なら、準備の負担は最小限で済みます。自分の得意なことで誰かに喜んでもらえる経験は、彼らにとっても手応えのある、持続可能な地域参画になるのです。

コミュニティの「主体性」の本質はシンプルです。「自分ができること」と「それを欲している人」をいかにマッチングさせるか。一人ひとりが自身のキャリアを少しだけ地域に引き出してみる。この小さな積み重ねが、現役世代をコミュニティに巻き込んでいくための最も現実的で強力な仕掛けになると考えています。

**小内** デジタル化による好例として注目したいのが、「釧路昭和中央6丁目町内会」の取り組みです\*5。

平均年齢36.6歳という若さを活かした同町内会の特徴は、デジタルへの「一本化」ではなく、紙との「併用」にあります。重要事項は紙、日常の共有はLINEと使い分け、負担の大きい集金はコンビニ払いを導入するなど、既存インフラの活用で徹底して「手間」を削ぎ落としています。こうした事務負担の軽減こそが、忙しい現役世代を地域活動に留める鍵になります。

また、私の住む地域でも、決して若い世代ばかりではない町内会がホームページやLINEを積極的に運用している例があります。これは単なる世代の属性の問題ではなく、地域に眠る「デジタルが得意な人」の力をいかに引き出せるかの証左と言えます。

さらに一歩進んだ提案として、自治体の公式LINEとのタイアップを挙げます。例えば江別市の公式LINEは、ユーザーが必要な情報を選択して受信できる優れた仕組みを持っています。私自身、ごみ収集日の通知には日々助けられています。こうした行政の既存システムに、町内会の地域情報を「相乗り」させてもらう形はどうでしょう。この現実的なステップこそが、弱体化しつつあるコミュニティを再建し、行政と共に持続可能な地域社会をつくるための「確かな処方箋」になると思います。

**片山** ある時、25歳のお母さんから一本の電話がありました。「自分が育った藤野の温かな地域関係を取り戻したい。そのためにコミュニ

ティバスを応援するマップを学生さんに作ってほしい」という依頼でした。しかし、私は「学生が作っても意味がない。あなたたちが自分の手で作り、自分の言葉で配ることに意味がある」と伝え、彼女たちの活動に伴走することにしました。

こうして結成された「札幌藤野多世代交流グループ WAO!」\*6の会議は、赤ちゃんの泣き声が響き、誰かが常に席を立つような大変なものでしたが、彼女たちは驚くほど生き生きとしていました。私はそれまで、子育て中のお母さんは「支援が必要な側だ」と決めつけていました。でも、彼女たちの本音は違ったのです。出産を機に社会から切り離され、孤立し、追い詰められる中で、「子どもを授かった今だからこそ、社会とつながりたい。誰かの役に立ちたい」と強く願っていました。

「忙しいから無理だ」と遠ざけるのではなく、託児スタッフを置くような、ほんの少しの「場」と「配慮」を整えてみる。そこには、想像もできないようなエネルギーに満ちた「地域の未来」が眠っています。これからのコミュニティに必要な力です。

**武岡** 最後に、これからの町内会に何かアドバイスをお願いいたします。

**林** 私が調査する農村部でも、地元の住民の間では、言葉にせずとも通じる「旧来の論理」と移住者などの外部からもたらされる「新しい価値観」のせめぎ合いが起きています。その際に重要なのは、互いを尊重し、新旧関係なく、良いものは取り入れていく、残していく「寛容さ」に他なりません。また、今日の議論を通じて感じたのは、私たちが無意識に前提としている「家族観」の危うさです。子育て世代向けの企画を充実させるほど、単身世帯や子どもを持たない方、あるいはLGBTQ\*7や障がいを持つ方々にとっては、地域が「遠いもの」になってしまうリスクをはらんでいます。



研究会委員によるパネルディスカッションの様子

\* 5 自治会町内会情報誌『まちむら』165 (2024年2月発行) 10-12頁を参照。

\* 6 札幌藤野多世代交流ラボWAO!  
<https://wao-smile.crayonsite.com>

\* 7 性的マイノリティの総称。

町内会が「地域の代表」を担う以上、特定の属性や価値観に偏らず、誰も排除されない「居心地の良さ」を実現していくことが肝要です。「この指とまれ」で集まれるポイントを多数用意すると同時に、どこにも止まらない人であっても、そこにいて良いという「余地」を残すこと。多様性が増すこれからの時代、町内会に求められるのは、ガチガチなコンテンツで埋めるのではなく、誰のどんな引き出しでも受け入れられる「懐の深さ」こそが、地域コミュニティの本質的な価値なのではないかと思います。

**小内** 現場の切実な声として、さらに2点を強調させていただきます。

まず、既存の事業内容をゼロベースで再検討すべきです。慣例で続けてきた行事の中には、現在のリソースでは維持できないものが多々あります。自治体に対しても、できないことは「できません」とはっきり伝える。この「事業・行事の取捨選択」こそが、組織をパンクさせないために今最も必要なことです。

私が所属する町内会を含め、単独での活動はすでに限界を迎えています。そこで重要になるのが、地域外の団体やNPOなどと協力する「外部に開かれた運営」です。自分たちだけで抱え込まず、多様な主体と手を取り合う形へシフトすべき時期に来ています。

最後に、未婚率の上昇と家族形態の変化への対応です。今後、単身者の増加により従来のファミリー層を中心とした町内会の枠組みでは対応しきれない課題が必ず顕在化してくると思います。

もちろん、町内会がすべてを担うことは不可能です。しかし、かつての近所付き合いのような「顔の見える関係性」は、孤立を防ぐ新しいつながりをつくる大きなきっかけになり得ます。こうした新たな層をどう受け入れ、現代版のセーフティネットを構築していくか。これは私たちが直面している最も喫緊の課題ではないでしょうか。

**片山** 私たちが取り組んでいる「誰かの苦しさに寄り添い、課題を解決する支援」という活動は、本来、相手が満たされることで、自分自身も満たされる。そんな温かな循環があるものだと思います。けれど、もし今、自分自身が満たされない思いを抱えたまま活動しているのなら、どうか少し立ち止まってほしいのです。

活動において、不真面目であってはいけませんが、真面目すぎて自分自身を削ってしまうのも、また違うのだと感じています。頑張りすぎて余裕がなくなると、その「しわ寄せ」は、皮肉なことに私たちが守ろうとしている支援対象者や、周囲のより弱い立場の人へと向いてしまうことがあるからです。

私の切実な願いは「まず、自分自身を大切にしてほしい」ということです。私たちが長く、良い支援を続けていくために、まずは自分自身を慈しみ、満たされた状態で、一歩ずつ進んでほしいと願っています。

**武岡** 今、町内会は担い手不足や加入率の低下といった多くの課題に直面しています。しかし、地域の中で「顔の見える関係」を築き、困った時に支え合う仕組みとして町内会が果たしてきた役割は、極めて大きく、替えのきかないものです。

それと同時に、本日の議論を通じて、停滞を打破する「新しい風」を取り入れる可能性が見えてきました。これまで接点の少なかった若い世代や女性、さまざまな市民活動団体など、今まで「外側」にいた方々に目を向け、関わりを持つこと。それこそが、地域コミュニティをより豊かに、より強固にアップデートしていく原動力になると確信しています。

(文責：開発調査総合研究所 主査 曾田顕子)

※本研究会委員四氏による質疑応答の内容は、下記よりご覧ください。

[https://www.hkk.or.jp/kenkyusho/file/report\\_2025-1qa.pdf](https://www.hkk.or.jp/kenkyusho/file/report_2025-1qa.pdf)



※報告書『持続可能な地域コミュニティづくりに向けた取り組み』は、下記よりご覧いただけます。

[https://www.hkk.or.jp/kenkyusho/file/report\\_2025-1.pdf](https://www.hkk.or.jp/kenkyusho/file/report_2025-1.pdf)

配布希望の場合は、下記までご連絡ください。なお、在庫がなくなり次第終了となります。あらかじめご了承ください。  
(一財)北海道開発協会開発調査総合研究所  
TEL：011-709-5213 FAX：011-709-5225  
mail：kenkyujo@hkk.or.jp

北海道の人口問題の危機  
ー地域の確かな将来に向けて考えたいことー

第2回 消える若い女性たち

(一財) 北海道開発協会 開発調査総合研究所長 目黒 聖直

誰が東京に向かうのか？

前回は、道内の地方町村で若い女性が都市部に転出して、同年代の男性に比べて数が少なくなっているという話をした。一口に都市部への転出といっても、道内の都市部（主に札幌圏）と道外がある。今回は、道外への転出について、状況を見てみたい。

表1は、過去5年間（コロナ感染症の5類移行は、この間の2023年5月）の北海道の転出入者数（転入者数－転出者数）を男女年代別に示したものである。マイナスは、転出数が転入数より多いということだ。一瞥して、男性よりも女性の方がかなりの転出超過であることがわかる。そして、その女性の転出は、殆どが15～34歳の若い層となっている。

一方、それ以外の年齢層（15歳未満の子どもと35歳

以上の層だが、子どもは多くの場合に35歳以上の親と一緒に移動していると考えられる）のうち、35歳以上では、男性はむしろ毎年一定数の転入がある一方、女性はそのようになっていない。言ってみれば、若い女性は、一度道外に出ると二度と北海道には帰ってこないのである。

余計なことだが、35歳以上では女性に比べて男性の転入が多いということは、既婚であっていい年齢層でありながら、夫婦揃ってではなく、独身男性が一人で北海道にやって来る（戻ってくる）ことを示しているという気がする。いかがだろうか。

では、若い女性がどこに出て行ってしまっているのかというと、大方予想がつくと思うが、それは、首都圏ー都三県（以下、「東京圏」と呼ぶ）である。

表1 北海道の男女年代別の転出入者数

(単位：人)

|       |    | 合計     | 15～19歳 | 20～24歳 | 25～29歳 | 30～34歳 | 15～34歳 | 0～14歳 | 35歳以上 | 15～34以外 |
|-------|----|--------|--------|--------|--------|--------|--------|-------|-------|---------|
| 2025年 | 全体 | -4,817 | -843   | -3,877 | -1,616 | -312   | -6,648 | -115  | 1,946 | 1,831   |
|       | 男  | -1,381 | -234   | -1,832 | -864   | -62    | -2,992 | -93   | 1,704 | 1,611   |
|       | 女  | -3,436 | -609   | -2,045 | -752   | -250   | -3,656 | -22   | 242   | 220     |
| 2024年 | 全体 | -6,328 | -787   | -4,623 | -1,594 | -248   | -7,252 | 51    | 873   | 924     |
|       | 男  | -2,012 | -195   | -2,113 | -824   | -43    | -3,175 | 43    | 1,120 | 1,163   |
|       | 女  | -4,316 | -592   | -2,510 | -770   | -205   | -4,077 | 8     | -247  | -239    |
| 2023年 | 全体 | -5,527 | -658   | -4,211 | -1,226 | -189   | -6,284 | -127  | 884   | 757     |
|       | 男  | -1,594 | -133   | -2,062 | -521   | -51    | -2,767 | -46   | 1,219 | 1,173   |
|       | 女  | -3,933 | -525   | -2,149 | -705   | -138   | -3,517 | -81   | -335  | -416    |
| 2022年 | 全体 | -4,023 | -499   | -3,445 | -1,413 | -99    | -5,456 | 125   | 1,308 | 1,433   |
|       | 男  | -559   | -1     | -1,519 | -579   | 65     | -2,034 | 98    | 1,377 | 1,475   |
|       | 女  | -3,464 | -498   | -1,926 | -834   | -164   | -3,422 | 27    | -69   | -42     |
| 2021年 | 全体 | -2,147 | -476   | -3,356 | -546   | 224    | -4,154 | 195   | 1,812 | 2,007   |
|       | 男  | -10    | 72     | -1,485 | -248   | 160    | -1,501 | 38    | 1,453 | 1,491   |
|       | 女  | -2,137 | -548   | -1,871 | -298   | 64     | -2,653 | 157   | 359   | 516     |

注・外国人を含まず（データ：総務省・住民基本台帳人口移動報告）

表2は、2024年に北海道の全転出入者数とそのうちの東京圏との間の転出入者数を示したもののだが、全年齢で見ると道外への転出（超過）女性4,316人の83%に当たる3,593人、若い女性に限ると4,077人中88%の3,606人が東京圏に向かっている。

この表で注目すべきもう一つの点は、札幌以外の道内各地から転出する人数が意外と多いことである。東京圏に転出した全女性3,593人のうち、札幌からの転出が1,656人に対して、札幌以外からの転出は1,937人で、およそ9：11になる。この年の札幌の全人口194万人は、全道504万人の38.5%なので、札幌と札幌以外の比率は大雑把に言って4：6（8：12）となる。8：12と9：11ということは、さほど大きな差ということではまい。つまり、以前は、都市のダム機能といって、地方の特に若者が県内の大都市に集まることで、地方から直接東京圏へ向かう流れを遮断することが期待されていたのだが、この結果を見ると、地方から東京圏への転出を札幌が阻止しているようには見えないのである。若い女性の転出（というより「流出」と言いたい）が深刻であることが明白である。

表2 北海道の転出入数と東京圏（2024年）

（単位：人）

| 地域   | 区分 | 全道外転出入者数 |        |       | うち東京圏への転出入者数 |        |       |
|------|----|----------|--------|-------|--------------|--------|-------|
|      |    | 全年齢      | 15～34歳 | それ以外  | 全年齢          | 15～34歳 | それ以外  |
| 全道   | 総数 | -6,328   | -7,252 | 924   | -5,544       | -6,585 | 1,041 |
|      | 男  | -2,012   | -3,175 | 1,163 | -1,951       | -2,979 | 1,028 |
|      | 女  | -4,316   | -4,077 | -239  | -3,593       | -3,606 | 13    |
| 札幌   | 総数 | -2,125   | -2,714 | 589   | -2,463       | -2,910 | 447   |
|      | 男  | -436     | -978   | 542   | -807         | -1,230 | 423   |
|      | 女  | -1,689   | -1,736 | 47    | -1,656       | -1,680 | 24    |
| 札幌以外 | 総数 | -4,203   | -4,538 | 335   | -3,081       | -3,675 | 594   |
|      | 男  | -1,576   | -2,197 | 621   | -1,144       | -1,749 | 605   |
|      | 女  | -2,627   | -2,341 | -286  | -1,937       | -1,926 | -11   |

（データ 総務省・住民基本台帳人口移動報告）

### 若い女性への注目

15～34歳の女性と言えば、大変な反響を呼んだ「消滅可能性都市」の議論で可能性判断の基準としていたところの年齢層たる20代及び30代女性すなわち「若年女性」の人口とも大まかに言って重なる。

しかし、ここでの議論は、「消滅可能性都市」論のように出産のために彼女たちが必要だから、という話ではない。この年齢層の女性の転出が顕著であり、そこを手当しなければならない、という問題意識である。つまり、「20代及び30代」ではなく、15～34歳の女性に注目するのは、表には示していないが、35～39歳の女性では転出数が大きな数値になっていない（転入増になっている年もある）こと、そして、なによりも、それに対して高校卒業が道外転出の機会になりうると考えられる15～19歳層の女性の動きに気を配らないとならないことからである。

「消滅可能性都市」の議論では、出産する女性という視点で見ると、東京圏への転出数がさほど多くはない35～39歳の層も含めて、20代と30代の女性を語る。一方、本稿では、出産のことは置いておいてどの層の流失が多いかと考えるから、高校卒業時を含む15～19歳の層も含める、というわけだ。

念の為に断るが、本稿で「若い女性」という場合、15～34歳の女性を指し、20代と30代を指す「若年女性」とは区別している。区別のための便宜であって、35歳以上の女性が「若くない」、つまり、老けている、と言いたいわけではないのは当然である。

ともあれ、若い女性たちが転出を思いとどまって地元に残れば、そこでの出生数が増加する事態も期待できる。だが、結果としてそのようなことにはなりうるとしても、それが目的なのではないとは改めて強調したい。この点は今後も述べていくが、大切なのは、出生数を増やすためには、最初からは出生数の増加を目指すべきではない、という一見矛盾した考えがカギになる、ということだ。

### 一般的な情報

ここで、これまでの記述との重複も発生するが、既存の公的な資料により、若い女性の東京圏への流入の問題を中心とした全国及び北海道の人口問題の概況を見ておきたい。

全国的な動向については、「地域課題分析レポート～ポストコロナ禍の若者の地域選択と人口移動～」(令和6年12月、内閣府政策統括官)が詳しい。

### 【全体的傾向】

- 1 地域人口の増減のうち社会増減については、全国を12地域に分けたときに、東京圏の一都三県のみ転入超であり、他地域は(北海道を含めて)全て転出超過である(この説明のため、概ね2016年～23年までの表やグラフが示されている)。ただし、近畿では東京圏への転出の一方で西日本や名古屋圏から一定数の転入があり、転出超幅は縮小しつつある。

### 【男女の違い】

- 2 東京圏の転出入は、以前は男性の方が転入増であったものが、2000年代に拮抗し、2010年以降は、女性の純流入が男性を一万人以上上回る傾向が続く(本レポートは、「こうした女性の東京圏への流入は、一部地域において未婚者の男女比に偏りを生じさせる要因ともなっていると考えられる」とする)。

### 【若年層の傾向】

- 3 2023年の数字によると、東京圏への人口流入は、全ての地域において20代前半が最も多い。次いで、転出元の地域によって、10代後半か20代後半が多い。
- 4 最近の複数のアンケート結果によると、若者が地元の都道府県から転出した理由としては、進学の場合、進学環境要因(行きたい学校があったなど)と生活要因(都会への憧れ、親元を離れたいなど)が挙げられる。就職では、就業環境として、志望業種、業務内容、賃金・待遇といったことがあり、生活要因としては、生活・娯楽などの利便性のほか、一人暮らしへの欲求や地元への不満などで地元から出たいという理由もある。
- 5 大学・大学院を卒業・修了見込みの就活生を対象にした民間調査(2025年)によると、地元就職を希望しない理由としては、キャリア・就業環境に関する理由と生活環境の項目が上がる。そのうち、女性が

明らかに多く選択(5%の有為水準)した項目に、「実家を離れたい」「地元の風土が好きではない」があったが、就業環境に関する項目では男女差はなく、女性の三大都市圏への純流入が多いのは、生活環境に関する理由が関係していると見られる。「都会の方が生活の上で便利だから」「地元以外に恋人がいるから」を挙げる率も、女性の方が高かった。

次に、北海道二十一世紀総合研究所(以下、「21世紀総研」)が作成して北海道(道庁)に提出した「北海道人口減少実態調査・要因分析事業報告書」(令和6年3月)を基に、一部これまでの記述と重なるが、北海道の状況を概観する。

### 【自然増減】

- 1 北海道での自然増減(出生数-死亡数)の推移を見ると、少子高齢化の進行に伴い、2003年以降は死亡数が出生数を上回る自然減が続いている。
- 2 自然減は年々拡大傾向にあり、2022年の自然増減は▲48,030人と過去最大の減少数を記録し、道内179市町村全てで自然減だった。

### 【社会増減】

- 1 北海道の社会増減(転入者数-転出者数、日本人のみ)の推移は、1960年以降、1995年の一年間を除く全ての年で転出超過(社会減)となっている。
- 2 2023年の社会増減は▲5,527人であったが、これを男女別に見ると、男性▲1,594人に対して女性▲3,933人と、女性の流出傾向が著しい。全国的な傾向とはいえ、北海道はその傾向が他県と比較しても大きく、女性の社会減少数が男性の2.47倍と、47都道府県でも5番目に大きい。また、女性の社会減少数の実人数では全国最多である。
- 3 2023年の道内高校の卒業生の都道府県外就職率は5.88%と全国で東京都に次いで2番目に低い(全国平均は17.83%)。ただし、高卒就職者の実数は年々減少している。

内閣府のレポートから言えることは、全国的に地方から東京圏に転出する動きがあり、転出者は20代前半を中心とした若年層に多く、男女別に見ると女性の方が東京圏へ移動している。北海道も、状況は概ね同様であることは、21世紀総研の報告書でも確認できる。

ただ、北海道と東京圏以外の他地域とを比べて、仮に何らかの指標で他府県よりよかったり（例えば、道外就職率が低いことの裏返しの高校卒業者の地元就職率の高さ）悪かったりしても、それで一喜一憂することにはならない。他府県の状況がどうであろうと、人口の流出が続いている限り、北海道としてはそれを抑制する努力を続けなければならない。

### （補論1）

北海道には小規模自治体が多いという特徴がある。令和2年の国勢調査によると、道内179市町村のうち、人口5千人以上1万人未満は40市町（全体の22.3%）、5千人未満は84市町村（46.9%）であり、合わせた124市町村は全体の69.3（69.27）%を占める。一方、全国平均では人口1万人未満の市町村の数は30.2%に過ぎない（田中秀明編『人口半減ショック 地域の新戦略』（日本経済新聞出版、2025年）掲載のデータによる）。

中でも、令和2年時点で栃木県や兵庫県では、一万人未満の市町村は皆無だった（その後、両県とも、一万人を切る町が現れた）が、北海道の市町村は全体の半分が一万人どころか5千人未満なのである。そして、人口が少なければ、それだけ将来の存続が不安になる。

しかし、例えば、人口を維持していく上でそこに雇用があることが重要であることを考えたとき、どんなところであろうと、50人の雇用をつくるのは大変だが、数人なら同じほどには難しくないだろう（現状、地方でも業種によっては人手不足が激しいと言われるが、ここではそうした具体的事情を捨象した一般的・抽象的議論とする）。

そして、その町にない新たな店舗を開業すれば、そこで3～4人が働くということもあるかもしれないが、

いかに人口の多い都市であろうと、いきなり市内で50人を雇用するチェーン店を立ち上げようとしたらハードルはかなり高い。

それでいて、人口が10万人を超えるような（北海道の感覚で言えば）相当に大きな都市ならば、もしかしたら50人の雇用が生まれてもおお全然十分でない、となるおそれもある。それに対して、小さな町であれば数人でも、それだけで十分なインパクトとなるのだ。

小規模町村だからこそ少しの変化で大きな効果を引き出せる、即効性がある、という認識で、現在の状況に立ち向かいたい。

### （補論2）

北海道の多くの若い女性が東京圏に転出してしまう問題は深刻ではあるが、注意したいのは、日本全体で見ても、例えば20代男性の人口約596.6万人は、女性568.1万人に対して28.5万人も多い（2025年。前号表1参照）ことである。

ローマ時代、女児100人に対して男児は105人産まれていたという。ところが、生後一年の時点では、男児は65%、女児は70%しか生存しなかったそう（河島思朗『古代ローマごくふつうの50人の歴史』（さくら舎2023年）による）。計算すると、一年後の生存数は、男児68人、女児70人と、ほぼ同数になる。同書によると、一歳以後の生存率には男女差がなかったとのことである。

赤ちゃんの死亡が激減した現代では、新生時の男女比105：100の割合がほぼそのまま大人になるだろう。そうならば、自然の摂理は生命力が弱い男児の比率を高く設定したが、医学的行為という人為がその摂理を歪めたということになる。そして、上述の596.6万人：568.1万人という比率を計算すると、女性100に対して男性は、なんと105.01だ！

## 北海道開拓に寄与した樺戸集治監 月形樺戸博物館

月形町 教育委員会 主幹（学芸員） 野本 和宏



HPはこちら



### 月形町の歴史

月形町は、明治14（1881）年に設置された「樺戸集治監」によって拓かれたまちです。樺戸集治監とは、明治維新期の政治犯や重罪人などが収監された国立の監獄で、宮城、東京に次ぎ、北海道で最初に設置された集治監（現在の刑務所）です。

北海道に集治監を設置するため、伊藤博文内務卿の命令により開拓史の長であった黒田清隆が道内から3か所の候補地を選定し、そのひとつが現在の月形町でした。北海道内陸部の調査は内務省の役人8人で行われ、調査の団長は内務省権正書記の月形潔でした。

月形町は、樺戸連山と大河石狩川に挟まれた囚人が脱走するには難しい地形であり、平地は密林地帯を開墾すれば農地として利用でき自給自足を実現できる適地である旨、伊藤博文内務卿に報告し設置することが決定しました。

人の住んでいなかった密林地帯に樺戸集治監が建

設・設置され、その周りに商人や移民が定住するようになりまちが形成され、空知管内で最初に設置されたまちとなりました。

### 町名の由来

はじめこの地は「シベツブト」と呼ばれていましたが、まちの名前を新たにつけることになり、初代典獄（刑務所長）の月形潔の姓から「月形」と名付けられました。

### 三縣巡視復命書

樺戸集治監の運営が始まり、当初は農地開墾を主として、自給自足で運営されていました。

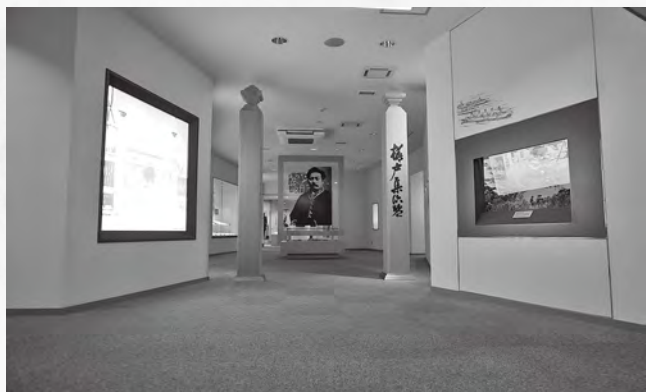
その後、太政官大書記官金子堅太郎が北海道を巡検した中で、当時の北海道は札幌県、函館県、根室県と三つに分かれており、連携が取れておらず、開拓も進んでいない状況にあったことから、ロシアの南下政策

を防ぐためにも早急に開拓を進める必要があり、このため囚人を使って道路をつくり、屯田兵や移民を入植させることを伊藤博文に復命しました。これが三縣巡視復命書です。

北海道は屯田兵や移民が入植し開拓したことはよく知られていますが、内陸部の地域が発展することができたのは、集治監に収監されていた囚人による農地開墾や道内の主要幹線道路の開削などの作業の賜物であり、北海道開拓の礎を築き上げたと言っても過言ではないと思います。しかしながら、この歴史の詳細はほとんど表に出ることはなく、知っている人は少ないでしょう。

## 月形樺戸博物館

当博物館は、樺戸集治監の歴史に着目し、多くの人に樺戸集治監が北海道開拓の歴史の一端を担っていたことを教えてくれる施設となっています。博物館の建物は3つあり、地下通路や渡り廊下でつながっています。



博物館本館

1つ目は、旧樺戸集治監本庁舎で、当時は事務所として使われていました。現在の建物は明治19（1886）年に建てられたものです。初代の建物は明治14（1881）年に建てられ開庁しましたが、明治19（1886）年に火災で本庁舎は焼失し、その後建てられたのが現在の本庁舎となります。大正8（1919）年に監獄が廃監になった後は月形村役場庁舎として使用され、その後、昭和

48（1973）年から北海道行刑資料館となり、平成8（1996）年からは月形樺戸博物館の構成施設となりました。本庁舎建物の基礎石は札幌の石山軟石が使われています。建物は、寄棟づくりで下見板張りの造りとなっており、重厚感のある歴史的な建物です。室内は典獄室（所長室）を再現した部屋や集治監全体の建物を再現した模型などを展示しています。

2つ目の建物は、文書や辞令書、看守に関連する資料、鉄丸といった当時の貴重な資料を見ることができます。また、映像シアターでは2本の映像を見ることができ、より理解を深めることができます。



看守や囚人に関する当時の資料

3つ目の建物は、月形町出身の彫刻家・本田明二氏<sup>ほんだめいじ</sup>の彫刻を展示しています。有名な作品としては、旭川市のスタルヒン球場にあるスタルヒンの銅像があります。ギャラリーでは見る人を引き付けるような作品を展示しています。

月形町は、樺戸集治監に収監されていた囚人や見張り役の看守などがいたことにより、商人や移住民が定住し、まちが拓かれました。

ほかではあまりないまちの繁栄の仕方ではありますが、ここ月形がなければ今の北海道はなかったかもしれません。

皆さん一度、月形町を訪れて樺戸集治監の歴史に触れてみてはいかがでしょうか。

# 北海道の開発と鉄道 —1世紀半の軌跡— 〈上〉



原田 伸一 (はらだ しんいち)

1950年生まれ。函館市出身。室蘭工業大学開発工学科卒業後、1973年4月、(株)北海道新聞社入社。編集局、函館支社長などを経て、2015年6月、常務取締役で退任。以後、鉄道関係の執筆活動に入る。著書に『函館・道南鉄道ものがたり』『海峡の鉄路 青函連絡船 110年の軌跡と記憶』『北海道 国鉄蒸気機関車の記録』『北海道の貨物列車』『年表と写真で見る北海道の国鉄』(共著)(いずれも北海道新聞社刊)がある。総務省北海道管区行政評価局「行政改善推進会議」座長。

明治政府が北海道の開拓に着手して間もない1880(明治13)年11月28日、開拓使による「官営幌内鉄道」の手宮駅－札幌駅間(35.9km)が開業し、午前9時、蒸気機関車「弁慶号」が客車3両を引いて手宮駅を出発しました。列車は真新しいレールの上を快調に走り、午後0時(正午)きっかり、歓迎の人波が待つ札幌駅に到着。ここに幌内鉄道は新橋駅－横浜駅間、京都駅－大阪駅間に続いて日本で3番目の鉄道として産声を上げたのでした。以来、ほぼ1世紀半にわたって鉄道は、北海道の近代化の担い手として大きな役割を果たすこととなります。第1回は開業から1930(昭和5)年までのほぼ半世紀の歩みを見ていきましょう。

## 石炭輸送から「千マイル」への道

幌内鉄道の目的は、大規模な石炭層がある幌内(現在の三笠市)や夕張などと、本州との航路を持つ小樽港を結び、首都圏に向けて石炭を送出するためでした。開業1年前には幌内炭鉱で採炭が始まっており、鉄道開通は急務だったのです。手宮駅－札幌駅間に続いて札幌駅－幌内駅間(55.3km)も完成し、1882(明治15)年11月13日、手宮駅－幌内駅間が全通開業。早速、翌14日には幌内駅から手宮駅まで貨車による石炭輸送が始まりました。

### ◆義経、弁慶、開拓使号も

幌内鉄道の建設は、アメリカから招いた鉄道技師ジョセフ・U・クロフォードによって指揮されました。機関車は同国から1-C形(先輪1軸－動輪3軸)6両を輸入。それらは長距離を走れるよう、燃料の石炭と水を積んだ炭水車を後ろに付けていました。1～5号は「義経号」をはじめ北海道に縁がある、または伝説的な武人の名前が付けられ、6号は義経のそばにいた静御前を差す「しづか号」と名付けられました。

| 幌内鉄道が購入した米国製機関車 |          |         |             |
|-----------------|----------|---------|-------------|
| 番号              | 名称       | 国有化後の番号 | 廃車後の状況      |
| 1               | 義経(よしつね) | 7101    | 京都鉄道博物館で保存  |
| 2               | 弁慶(べんけい) | 7102    | 鉄道博物館で保存    |
| 3               | 比羅夫(ひらふ) | 7103    | 解体          |
| 4               | 光圀(みつくに) | 7104    | 解体          |
| 5               | 信弘(のぶひろ) | 7105    | 解体          |
| 6               | しづか      | 7106    | 小樽市総合博物館で保存 |

機関車は部品に分けて船で運ばれ、日本人の研修も兼ねて手宮で組み立てられたのです。ダイヤモンド型の煙突、牛除けのカウキャッチャー、最新の自動連結器、運転席前部に付けられた鐘など、新橋駅－横浜駅間を走ったイギリス製の機関車とはずいぶん異なる姿でした。

当時のアメリカは西部開拓が盛んな時期で、高性能の機関車が続々作られていました。独特の煙突は火の粉の飛散を防ぐためですし、連結器は操作が簡単かつ安全で、長編成の重量にも耐えられる設計でした。客車は8両で、1等車1両、2等車2両、旅客・荷物合造車2両、3等車3両という内訳。高官が使う1等車は「開拓使号」と名付けられ、長さは約11m、座席はスプリング付きで朱と緑の絹のビロードで覆われ、天



写真1 現在も磨き上げられて保存展示されている「義経号」（撮影地は大阪交通科学館、現在は京都鉄道博物館で展示）

写真2 鉄道博物館（さいたま市）で展示されている「開拓使号」

写真3 明治25年頃撮影された岩見沢駅構内（原田伸一所蔵）

井は白の装飾、ストーブも備えられた豪華な作りでした。現在は、さいたま市の鉄道博物館で「弁慶号」とともに復元展示されています。

また、貨車は台車が17両、屋根のある函車が9両の計26両でスタート。これらに石炭や生活物資を乗せて往来したのです。1885（明治18）年4月改正の列車ダイヤによると、手宮駅－幌内駅間の直通列車は1日2往復（他に手宮駅－札幌駅間1往復）あり、片道5時間かけて走っていました。

#### ◆採炭と輸送、北炭が一手に握る

幌内鉄道は順調に輸送業務を充実させていきますが、営業成績は芳しくありませんでした。そこで、北海道理事官だった村田堤という人物が「不振の原因は官僚機構と経営手法にある」と採炭と鉄道を分離した上で、石炭を増産して単価を引き下げる提案をします。これが幹部に認められ、村田は職を辞して1888（明治21）年4月、「北有社」を設立して幌内鉄道の運輸営業権を譲り受けました。新たに「官有民営方式」を始めた村田は、幌内太（のちの三笠）駅－幾春別駅間の延伸工事を完成させるとともに、許可移民に無賃乗車制度を適用するなど、積極的な経営に乗り出したのです。

しかし、資金不足で新線建設が滞り、経営が危うくなったことから、「官」の手を離れ「民有民営」に向けて動き出します。ここに登場したのは、村田と同じ北海道理事官だった堀基<sup>ほりもと</sup>という人物です。旧薩摩藩閥の1人である堀も退職し1889（明治22）年11月、東京の財界人らの後押しも得て「北海道炭礦（鉦）鉄道会社」（以下、北炭と表記）を設立します。政府は「開拓の促進と交通網の整備」を旗印に、北炭に対する手厚い優遇措置をもって認可し、北炭は炭鉦の採掘及び鉄道を一手に握る国策会社として経営を始めました。

北炭は早速、新線建設に着手し①岩見沢駅－歌志内駅間、②追分駅－夕張駅間、③岩見沢駅－室蘭駅（現・東室蘭駅）間を次々と開通させます。これによって、空知地方の産炭地が拡大すると同時に、石炭積出港として室蘭港が加わり、本州への石炭輸送が強化されたのです。この時期、機関車を国内製造する機運が高まり、北炭は手宮工場で「義経号」をモデルに「大勝号」（写真4）を製造するなど、技術向上にも努めました。



写真4 北炭手宮工場で日本人だけで製造した「大勝号」（小樽市総合博物館）

ところで北海道開発の主体となった開拓使は、中央直結の官庁で、1871（明治4）年5月、札幌に開拓使庁を置き、函館と根室に出張開拓使庁を設けました。翌年には初の「開拓10カ年計画」を策定し、移民受け入れ制度を整える他、亀田（函館近郊）と札幌を結ぶ札幌本道を完成させるなど、社会資本の整備に力を入れます。

ところが日がたつにつれ、開拓政策をめぐる政府と北海道の現場の不協和音が大きくなりました。このため政府は鉄道開業後の1882（明治15）年、開拓使を廃して函館・札幌・根室の3県制度を実施するとともに、鉄道を含む開拓使の直轄事業を農商務省の管轄に移し、政府の意向の徹底を図ることにします。ところがこれもうまく機能せず、4年後、今度は県制度を廃



写真5 狩勝峠など急勾配を上るため北炭が1902（明治35）年に導入したアメリカ製機関車（国鉄では7350形）＝札幌市・川村雪江氏所蔵

止して北海道全体を一括管理する北海道庁の設立に至りました。

北炭による鉄道営業が始まったころは、そうした“猫の目行政”が落ち着き、同時に石炭をはじめ農林・水産など北海道の資源産業の将来性が注目され、開拓移民が増える時期にありました。北炭は貨物だけでなく旅客の便宜を図るため札幌駅をはじめ、岩見沢駅、江別駅などを大規模に改築する他、高性能の機関車（写真5）を次々と導入し、現在につながる道央圏の鉄道網を拡大していきました。

#### ◆官設鉄道が道東北に延伸

一方、釧路方面では1892（明治25）年9月8日、跡佐登駅－標茶駅間で「釧路鉄道」が営業を始めました。これは「日本初の民間鉄道」とされ、アイヌ語でアトサヌプリ（裸の山の意）と呼ばれる硫黄山で採取される硫黄を釧路港に運ぶための専用線（43.2km）です。経営者は後に安田財閥の祖となる安田善次郎で、アメリカ製機関車2両の他、貨車19両、客車2両で開業。マッチの原料となる硫黄は標茶で釧路川の船に積み替えられ、釧路港に運ばれたのちアメリカに輸出されました。

採掘や浚渫に当たっては、標茶に開設された釧路集治監の囚人（受刑者）500人以上が使役されました。その結果、多くは硫黄の粉末によって眼病を患い、栄養不足から脚気を発病するなど、凄惨な状況をもたらしました（その後、禁止される）。釧路鉄道は1896（明治29）年8月、乱掘により休止となりましたが、路盤の一部は釧網本線建設の際、再利用されました。

さて、「富国強兵」の掛け声のもと、近代化を推進する日本は、朝鮮半島の権益を巡って清国（現在の中国）と対立し、1894（明治27）年7月、日清戦争が始

まりました。日本はこれに勝利しますが、今度は南下政策を進める隣国ロシアとの確執が厳しくなり、北方防衛を固めるためにも釧路・根室の道東方面、旭川・稚内の道北方面に鉄道を敷設する必要性が高まってきました。

こうした状況の中、北海道の鉄道建設計画を巡って1896（明治29）年5月、「北海道鉄道敷設法」が公布されました。これを受け、北海道庁が管理する「北海道官設鉄道」が設立され、①旭川駅－帯広（現在の富良野線経由）駅－釧路駅間、②旭川駅－比布駅間が計画に上がります。まず砂川駅で止まっている北炭路線と連絡するため、空知太駅（現在の砂川駅と滝川駅の間）を開設して工事に着手。途中、石狩川の鉄橋や狩勝峠のトンネルなど難工事が続きましたが、順次開業して行きました。

ただ、現在の函館本線のうち、函館と小樽を結ぶ路線は計画から外されました。当時、北海道随一の街として賑わっていた函館では、鉄道建設を働きかけていましたが、政府は函館は海運が盛んなことを理由に却下していました。このため、函館の財界人が集まり1899（明治32）年11月、「函樽鉄道会社」を設立。再三にわたって中央陳情した結果、翌1900（明治33）年5月、政府からやっと建設の認可が下りました。これを機に社名は「北海道鉄道会社」に変わります。

#### ◆ロシア進出、函館の鉄道急ぐ

一方、清国で同年、外国の排斥を掲げて民衆が蜂起した「義和団事件」が勃発し、それをきっかけに欧米列強と日本が軍隊を派遣。義和団の擁護に回った清国の宣戦布告を受け、連合軍が北京を総攻撃する事態になりました。各国の思惑が入り混じる中、日本はロシアに対する危機感を一段と募らせます。現にロシアは、モスクワから極東のウラジオストクまで約9,300km（地球1周の約4分の1）に及ぶシベリア鉄道（図1）を建設中で、もし完成すれば、大量の兵員を中国の戦

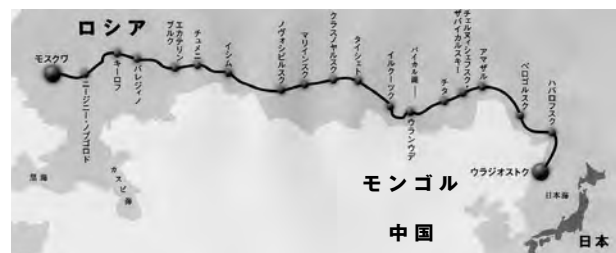


図1 シベリア鉄道現在の路線図

線に送り出すことが可能になるのです。

こうした事態に政府・軍部は「北海道防衛のため旭川の第七師団と函館山の要塞を繋ぐ<sup>つな</sup>鉄道が必要だ」と、鉄道の役割を「拓殖」から「防衛」に転換させました。これが追い風となって北海道鉄道は1902（明治35）年6月、函館－小樽間の工事を両側から開始します。工事に当たっては政府から利子補給を受けることになり、その際「起工より3年半以内に全線開通させよ」との強い指示がありました。

日ロ両国の交渉は破綻し、1904（明治37）年2月、ついに日ロ戦争が勃発しました。シベリア鉄道はバイカル湖の難所で工事が滞っており、中国領土内をう回するルートを取りますが、兵員輸送は遅れます。この間隙をつくように、北海道鉄道は山岳部を急曲線、急勾配、さらには多数のトンネルを掘削して同年10月、わずか2年半足らずの短期間で函館駅－高島駅（現・小樽駅）間の全線開通を成し遂げました。

高島駅－小樽駅（現・南小樽駅）間（1.6km）の完成は翌年8月に持ち越しますが、これによって第七師団の兵員を速やかに輸送する態勢ができたのです。これに対してロシア側は難所のバイカル湖に連絡船を導入するなどして対抗し、北海道鉄道の全通とほぼ同時期の1904年9月、暫定的とはいえ全面開業に至りました。こうした両国の動きは歴史上、鉄道が戦争に本格利用された初の事例として記録されています。

#### ◆鉄道国有化、青函連絡船も就航

日ロ戦争後の1906（明治39）年3月、鉄道国有法案が可決・成立し、北海道炭鉱鉄道及び北海道鉄道が政府により買収されました。これにより1987年（昭和62年）まで続いた国有鉄道（国鉄）の基礎が築かれたのです。北炭は国有化で得た多大な資金を基に英国企業と組んで室蘭に日本製鋼所を設立するなどし、以後、北海道の産業界のけん引役となります。

こうした状況の中、函館と青森を結ぶ定期連絡船構想が具体化してきました。上野駅と青森駅を結ぶ大規模私鉄の「日本鉄道」がイギリスの造船所に最新のタービン船2隻を発注。両船は比羅夫丸、田村丸と名付けられ、1908（明治41）年3～4月に青函航路に就航します。以後、旅客と車両を積載する貨客船や、貨車専用の貨物船が続々建造され、北海道は本州と直結し、旅客・貨物輸送の近代化が図られました。

政府は1910（明治43）年4月から「北海道拓殖事業15カ年計画」を始め、開発のレベルを上げる取り組みに入ります。同年、苫小牧では王子製紙工場が操業を開始し、以後、各製紙会社が立地する先駆けとなりました。国鉄はこうした波に乗り、釧路、網走、留萌、名寄などに延伸工事を進めた他、制約が少ない軽便鉄道法を使って岩内、上磯、万字、湧別などの各軽便線を開業させていきます。

1916（大正5）年5月、道内の鉄道路線の総延長が1,000マイル（当時の距離はマイルで表示、約1,600km）に達し、札幌・中島公園で盛大に祝賀会が開かれました。1920（大正9）年には第1回国勢調査が行われ、北海道の人口は約236万人に増加。北海道産米の収穫高が100万石（約15万トン）を記録する一方、工業生産額が農業生産額を初めて上回り、工業発展も展望できるようになりました。（写真6、図2）



写真6 1913年（大正2年）から製造が始まり、道内に多数配置された9600形（原田秀一（筆者の祖父）撮影、1920年代と推定される）  
図2 「北海道鉄道一千哩（マイル）」を祝賀する記念絵葉書。鉄道路線が描かれている（『北海道鉄道百年史 上』より転載）※地名・駅名は右横書き

1921（大正10）年10月に根室駅が、翌年11月には稚内駅（現・南稚内駅）が開業し、札幌を中心に各主要都市が鉄道で結ばれました。同年8月には札幌・函館など6都市で市制を実施。翌年には町村制が施行され、身近な行政制度が整っていきます。日ロ戦争後、日本が樺太の南半分を領土化したことで、1923（大正12）年5月、稚内と樺太の大泊（ロシア名コルサコフ）を結ぶ稚泊航路が開かれ、1928（昭和3）年3月には函館駅－稚内駅間に急行列車が設定されました。これにより上野から樺太の中心地・豊原（ロシア名・ユジノサハリンスク）まで急行列車と連絡船を乗り継げば2泊3日、約47時間で到達できるようになりました。「昭和の高速時代」の幕開けです。しかし、軍事力を背景にした帝国主義の台頭により世界が激動化する中、鉄道も否応なく戦雲に巻き込まれるようになります。

（3回連載します）

## 「香りの里」滝上町が誇る 希少な和ハッカ栽培

(株)滝上町和ハッカ・ラボ

代表取締役 藤村 利史さん (ふじむら としふみ)

滝上町商工会 巻島 純一郎さん (まきしま じゅんいちろう)

農山漁村における地域の活性化や、個性的で魅力ある地域づくりの優れた活動を紹介するシリーズ。

今回は「わが村は美しくー北海道」運動第11回コンクールで奨励賞を受賞した「(株)滝上町和ハッカ・ラボ」の皆さまに、和ハッカ畑でお話を伺いました。

### 《生産農家と商工会の連携で設立》

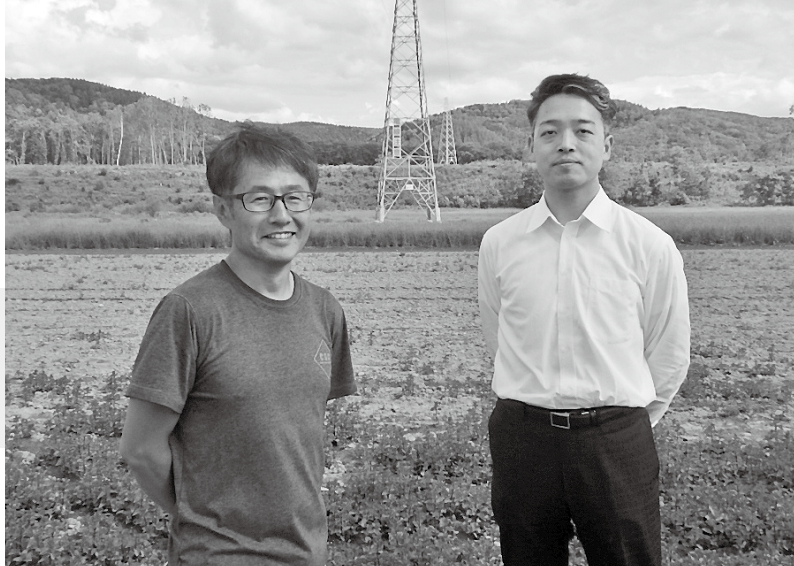
旭川市から車で約2時間半。「香りの里」と呼ばれる滝上町は、日本最大級の広さを誇る芝ざくらの「花の香り」、主要産業である「木の香り」、そして、日本一の生産量を誇る「和ハッカの香り」など、季節ごとにさまざまな自然の香りが漂うまちです。

「(株)滝上町和ハッカ・ラボ」は、生産農家3戸と滝上町商工会が連携し設立されました。

日本一の栽培面積を誇る和ハッカ栽培は、雑草取り、収穫、蒸留など、ほとんどが手作業のため手間がかかり、それに見合った収益も見込めないため生産農家が激減していくなか、希少価値に魅了されたメンバーたちが、国産ハッカを途絶えさせてはいけない、守っていかなければとの思いで、アウトドアミストなどの商品開発、販路開拓、イベントなどのPR活動に精力を注いできました。



アウトドアミスト  
SUUT COOL



### 《北海道最強コンビニエンスストアとの出会い》

販路拡大を図るなか、2018年北海道発大手コンビニ「セイコーマート」から、和ハッカを使った商品を販売したいと依頼が飛び込んできました。

“チョコミントアイスバー” “和ミントモヒート” “ミントキャンディー” “飲むチョコミント”などが次々と商品化され、これからの暑い夏のおすすめは、清涼感がクセになる“和ミントソーダ”です。ぜひご賞味あれ！



### 《和ハッカを守るために》

「(株)滝上町和ハッカ・ラボ」が目指すところは、生産農家を増やし、滝上町の和ハッカの知名度を全国区に拡げることです。

後継者がいない現在、会社として生産農家を守っていく仕組みを構築することに重点を置き、滝上町商工会と強力なタッグを組んで、滝上町から和ハッカの魅力を発信していきたい。

15年前ハッカに魅せられて農家となった藤村さん、地域を盛り上げたいという巻島さん、お二人の情熱が、太陽が降り注ぎ、時折風と共にハッカの爽やかな香りを運んでくるハッカ畑で、心地よく響いてきました。

当協会ホームページ、「わが村は美しくー北海道」運動第1～9回受賞団体の活動概要をまとめた冊子『生産空間の活性化に資する地域事例集』をご覧ください。



# すずきものの ほっかいどう スケッチ

第56回

## 麦畑が噴火し、 地表を押し上げ 誕生した山

今回の“ほっかいどうスケッチ”は小学生の時、社会見学で初めて見た昭和新山。茶色い岩肌からもくもくと白い煙が上がり、火山のエネルギーを肌で感じて印象深く残っている。昭和新山が当初、有珠新山と呼ばれていたことを最近知って、改めて掘り下げてみた。半世紀以上前のその社会見学時に、昭和新山の成り立ちについて学んだはずなのに、すっかり忘れていた。

昭和新山は、活火山である有珠山の活動で何度も地震が起き、麦畑だったところにマグマが噴火し畑を押し上げ、1943年～1945年のたった2年間で約400メートルの山になったという、世界でも非常に珍しいケースの山。興味深いのはこの地域の郵便局長だった三松<sup>みまつ</sup>正夫<sup>まさお</sup>さんが残した「ミマツダイヤグラム」だ。

噴火が起こり隆起が始まってから終息するまでその成長過程を毎日、定点観測でスケッチを描き、地震の回数やそれに伴うさまざまな現象について記録していったのだ。三松正夫さんが成し遂げた、このデータとしてのスケッチの正確さがすごい。この「ミマツダイヤグラム」は世界的に評価され、昭和新山は1951年に国の天然記念物に指定されている。

そしてできてからずっと暫定的に有珠新山と呼ばれていたが、1960年に火山学者の田中<sup>たなか</sup>館博士が命名。改めて昭和新山になったそうだ。麓には三松正夫記念館があり、記録した資料が展示されている。次に行くチャンスがあれば、記念館でスケッチなど資料を拝見し、有珠山ロープウェイに乗って、眼下に広がる未だ白煙をあげている昭和新山を再び眺めたい。





## すずき もも

イラストレーター・絵本作家／スローフードさっぽろ会員

東京生まれ、北海道夕張育ち。広告や雑誌、カレンダーなどのイラストを描くほか、イラストで綴る町案内の本や絵本などを執筆。ほか、「スローフードさっぽろ」を2016年に立ち上げ、食を中心に環境や暮らしの大事に取り組んでいる。著書に絵本「はるとなつ はたけのごちそうなーんだ?」（アリス館）「おいしい大地、北海道」（イースト・プレス）がある。近著に絵本「はたけのごちそうなーんだ? くだもの」（アリス館）がある。モットーは4つのS。「Simple, Slow, Small, Smile: ささやかに、ゆっくり、ほどほどに、にこにこ」。

## 地方創生

### 第3期浜頓別町まち・ひと・しごと創生総合戦略

#### 浜頓別町地方創生推進室

#### はじめに

浜頓別町は、日本の北海道北部、宗谷総合振興局管内南部に位置するオホーツク海に面した町です。この町の総面積は401.59km<sup>2</sup>で、その約70%は山林や原野という豊かな自然に囲まれています。広大な自然環境が特徴の浜頓別町には、訪れる人々を思わずうっとりさせる魅力が詰まっております。

地形としては概ね平坦で、南東・南西には山岳地帯が広がる中、頓別川とクッチャロ川が合流する流域には広大な酪農地帯が存在します。この地帯では町の主要産業となる酪農が営まれており、穏やかな牧場の風景が広がり、一息つきたいときの癒しの場をとまっております。

また、浜頓別町には全国的にも価値の高い自然資源が多く点在しています。その中でも圧巻なのがラムサール条約湿地に登録された「クッチャロ湖」。この湖は、渡り鳥の飛来地として国際的に知られ、美しい自然の中で鳥たちの舞いを観察したり、アウトドア活動を楽しむことができます。さらに、クッチャロ湖畔には源泉かけ流し温泉を楽しめるコテージも整備されており、雄大な自然の中でゆったりとした滞在を満喫することができます。「ベニヤ原生花園」では色鮮やかな花々が咲き誇り、「神威岬（斜内山道）」からは壮大な景色が一望できます。どれも自然愛好家や観光客を虜にするスポットであります。

オホーツク海の恵みと山岳地帯の豊かさが融合した浜頓別町では、ホタテやカニ、サケが特産品として知られており、海産物の新鮮な味わいは一度訪れた人を虜にします。酪農製品も地元ならではの深い味わいで、

毎日の食卓に温かみを添えています。また、浜頓別町は古くから「砂金のまち」としても知られ、砂金採り体験や地域資源を活用した交流事業などを通じて、観光振興や関係人口の創出にも力を入れています。地域ならではの歴史や文化に触れられる取り組みは、多くの人々を惹きつけています。

さらに、浜頓別町では3名の国際交流員（CIR）が活躍しており、町内の外国人住民や地域住民との交流を深めるため、毎月のように国際交流イベントや文化体験活動を開催しています。多文化共生を大切にしながら、地域住民と外国人が自然に交流できる環境づくりを進めており、こうした活動は町の魅力向上や交流人口・関係人口の増加にもつながっています。

季節ごとに開催されるイベントも魅力的です。「自然」をテーマにした催しや地元文化を楽しむ行事は、町の風物詩となっており、住民だけでなく観光客も一緒に盛り上げられる場となっています。伝統的な文化と豊かな自然が融合するこの町は、人々に静けさと豊かさを同時に感じさせてくれます。

浜頓別町は、どこか懐かしく、それでいて新鮮さに満ちた町です。自然の恵みと住民の温かさが織りなすこの町の魅力に触れてほしいです。訪れる誰もが特別な時間を満喫できること間違いなしです。



クッチャロ湖



クッチャロ湖に飛来する白鳥



### 人口の推移

本町の人口は、戦後の開拓入植などにより一時的な増加を見せ、住民基本台帳登録者数が昭和39年には8,767人とピークを迎えました。しかし、その後は人口流出が始まり、現在に至るまで長期的な減少傾向が続いています。令和8年1月時点の人口は3,162人まで減少し、地域の存続を危惧する状況に陥っています。

本町の出生数は、年次による変動はあるものの、人口減少に伴い着実に減少を続けています。一方、死亡数は年次ごとの変動を見せながらも、高齢化の進行により年々増加傾向が顕著となっています。かつては、出生数が死亡数を上回る「自然増」の状態を維持していましたが、現在では「自然減」が続いており、これが人口減少を加速させる大きな要因となっているのが現状です。

人口減少と高齢化は地域社会の活力を損ない、産業や経済活動を停滞させる懸念を抱えています。これらの課題に対し、町として早急かつ持続可能な対策を講じる必要があり、未来に向けて抜本的な構造転換を目指すことが求められています。浜頓別町の明るい未来を実現するためにも、現在の状況を深刻に受け止め、地域住民と連携しながら、人口減少という重大な課題に立ち向かっていかなければなりません。

### 浜頓別町まち・ひと・しごと創生総合戦略の位置付け

浜頓別町では、国が策定した「デジタル田園都市国家構想総合戦略」および北海道が定める「北海道創生総合戦略」を十分に踏まえながら、町の最上位計画である「浜頓別町まちづくり総合計画」を構築しています。この総合計画は、令和元年度から10年間を計画期間とし、浜頓別町が取り組むまちづくり全分野の方向性を定めるものです。さらに、個別の行政計画を総合的に統括する役割も担っています。

その中でも「浜頓別町まち・ひと・しごと創生総合戦略」は、人口減少対策や地域活性化を目的とし、計画期間を5年間に設定しています。この戦略では、まちづくりに関わるすべての分野を横断的な視点で捉え、多角的な施策を展開しています。現在実施中の第3期「浜頓別町まち・ひと・しごと創生総合戦略」では、第2期戦略の成果や課題を詳細に検証し、国の第2期「まち・ひと・しごと創生総合戦略」や「デジタル田園都市国家構想総合戦略」、さらに町の第6次「まちづくり総合計画」との整合性を図りつつ見直しを進めてきました。

この戦略では、デジタル技術の進展による首都圏など都市部から地方へ分散する動きを背景に、地方創生を推進していくことを重点に据えています。地域の未来を担う今の子どもたち、そしてこれから生まれてくる子どもたちに、より良い故郷を引き渡すために、浜

頓別町では10年、20年先を見据えた施策の展開を目指しています。地域の資源や可能性を丁寧に分析しながら、この町独自の地方創生にしっかりと取り組むことで、浜頓別町の持続的な発展と活性化を実現していきます。

浜頓別町は、未来をしっかりと支える戦略をもとに、地域の魅力をさらに高め、世代を超えて豊かさと活力に満ちた町づくりに取り組んでまいります。



### 基本目標と具体的な施策

#### 【基本目標1】浜頓別みらいプロジェクト～かなえる～

若い世代が、浜頓別町で安心して結婚・出産・子育てをしやすい地域社会をつくとともに、確かな学力と豊かな郷土愛を育む育成が可能になる環境を目指します。

- (1) 出会いの場のサポート支援
- (2) 保健・医療の充実
- (3) 児童福祉の充実
- (4) 学校教育の充実
- (5) 生涯教育の充実

#### 【基本目標2】浜頓別しごとプロジェクト～かせぐ～

当町の発展を支える基幹産業である農林水産業をはじめ、町内で働くことのできる環境を整備し、地域の活力を支える生産人口を増やすことを目指します。

- (1) 農林水産業の経営強化
- (2) 商工業の活性化
- (3) 各産業の生産性強化
- (4) 地域が誇る浜頓別ブランドの形成
- (5) 後継者対策
- (6) 新規就業者の確保に向けた情報発信・サポート
- (7) 外国人就業者の確保・サポート

#### 【基本目標3】浜頓別くらしプロジェクト～ささえる～

少子高齢化社会において、安心して生き生きとした暮らしを営むことができる環境を目指すとともに、近年関心が高まっている災害への対策など、安心して暮らせる環境を目指します。

- (1) 暮らしのサービスの充実
- (2) 福祉の充実
- (3) 防災・減災の強化
- (4) 住民参画の推進
- (5) コミュニティ活動の充実
- (6) 移住・定住希望者の確保に向けた情報発信・サポート
- (7) 共生社会の実現

#### 【基本目標4】浜頓別魅力発信プロジェクト～にぎわう～

観光資源の活用や満足度の向上、都市・他地域とのつながり構築などにより、観光客満足度向上と、関係人口の創出を目指し、地域が一体となった魅力発信で交流人口を増やし、浜頓別町ファンの拡大を目指します。

- (1) 地域が一体となったイベントの振興
- (2) 浜頓別のファンづくり
- (3) 観光地としての魅力PR
- (4) 観光の拠点の整備

## 取組事例 1



## 取組事例 2



## おわりに

地域内外の人々に愛され、誇りを持てる町づくりを実現していくためには、何よりも一人ひとりが主体的に関わり、協力し合う姿勢が欠かせないと考えております。浜頓別町では、活力に満ち溢れた町を次世代へと受け継ぐため、その核となる戦略を継続的に深化・進化させていくことが重要であると考えています。

これからも、町の特徴を最大限に活かし、地域資源を磨き上げながら、本町ならではの独自性と魅力を高めていきます。そして住民や訪れる人々が心から安らぎ、未来への可能性を感じられる町として歩み続けることを目指します。

浜頓別町の挑戦はまだ続きます。その軌跡は、次世代への確かな希望と誇りとして刻まれることでしょう。高い志を胸に、共に「未来に繋ぐまち」を創り上げていきます。

# ガストロノミックツーリズム in 北海道

～食と文化の観点から地域を見つめ、北海道を学ぶ旅～

## 第12話 「留萌」

遊佐 順和 (ゆさ よりかず)

公立大学法人旭川市立大学 地域創造学部地域創造学科 教授

東京都出身。北海道大学大学院教育学専攻修了。大学卒業後、日本フィルコン株式会社、池協会計事務所、AIR DO北海道国際航空株式会社、株式会社ホテルオークラ札幌などの勤務を経て、2010年より札幌国際大学に奉職し、2025年より現職に就く。本務の傍ら、内閣府地域活性化伝道師、北海道住宅供給公社理事、旭川市工芸センター運営委員会委員、旭川市国際交流委員会委員長、一般財団法人北海道開発協会評議員、一般社団法人和食文化国民会議全国「和食」連絡会議「和食」地域特派員なども兼務する。



今回は北海道の北西部、日本海沿岸に位置する留萌管内の留萌市、増毛町および羽幌町（焼尻島）など、海岸線オロロンラインを旅した際に訪ねたまちをご紹介します。留萌管内の中心である水産都市留萌市は、1955（昭和30）年ころまではニシン漁とともに発展した港町です。市内にはニシンの卵である「かずの子」の商品を製造する水産加工会社が多く、その加工生産量は日本一を誇り、黄色いダイヤとして永年にわたり留萌を発展させたまちの基幹産業となっています。近年では、お正月の縁起物として重箱の詰め物や松前漬をはじめ、チーズと合わせた珍味や辛子マヨネーズの和え物など酒の肴<sup>さかな</sup>に至るまでバリエーション豊富です。旧留萌<sup>しにせ</sup>駅舎の近くには、にしんづけを看板商品とする老舗漬物店もあり、全国各地で開催される北海道物産展では多くのファンが会場に駆けつけています。

留萌市は夕日の美しいまちとしてもつとに有名で、日本海に静かに沈む夕日は「日本一の落陽」といわれ、夕日の絶景スポットとして知られる黄金岬海浜公園で眺める夕日はとても見事なものです。

### 留萌産にこだわって誕生した夕日に映える小麦

2011（平成23）年秋、留萌・麦で地域をチェンジする会（<sup>なか たかひこ</sup>仲田隆彦会長／フタバ製麺社長）は、留萌産の小麦を使った商品「RuRu Rosso（ルルロッソ）」を誕生させました。留萌を意味するアイヌ語ルルモツペの「ルル」とイタリア語で「赤」を意味する「ロッソ」を組み合わせ合わせた造語で、赤は夕日の意味もあります。この名称には美しい夕日のまち留萌ならではのこだわりと、ふ



船場町1丁目 井原水産本社  
「かずの子オブジェ」



栄町2丁目 丸夕田中青果  
「やん衆にしんづけ」



大町2丁目 黄金岬海浜公園で望む「日本一の落陽」  
（写真提供：留萌市地域振興部）



ルルロッソ「<sup>のぼり</sup>織、生パスタ麺、乾麺」  
（製造：フタバ製麺、販売：お勝手屋「萌」ほか）

るさと留萌をこよなく愛する熱い想いが込められています。豊かな風味とモチリとした食感、小麦生産から小麦粉の加工まで留萌管内で行われ、自然豊かな「留萌」が表現された地域が誇る逸品です。

留萌管内にはルルロッソを使った料理を味わえる飲食店が数軒あります。留萌のまちなかの「Cafe Boo」では、ゆったりとしたレイアウトの店内でルルロッソのミニバゲット、ピザ生地や各種パスタを味わえます。



開運町3丁目 Cafe Boo「店舗外観、ピザ・パスタ」

このほか、留萌のまちなかを散策すると、永年にわたり常連客が足繁く通われるレトロな喫茶店も数軒あります。旧留萌駅舎前には、昭和を感じさせる銀器のシュガーポットやレトロな雰囲気<sup>しつら</sup>の設えで、ゆったり静かに過ごせる喫茶店があります。かつて列車が走り賑やか<sup>にぎ</sup>だったまちの往時に想いを馳せながら、旧駅舎を見つめ、旅先の静かな港町でゆっくりと流れる自分時間を心地よく過ごせる素敵なお店です。



米町1丁目 旧駅舎前に佇むレトロな銘喫茶 きたの  
「大きな窓辺の客席から望む旧留萌駅舎、ケーキセット」

## 豊かな文化薫り、海山の幸に恵まれる 増毛町

かつてJR留萌本線の終着駅があり、古くはニシンのまちとしても栄華を極めた増毛町。旧増毛駅舎周辺のふるさと歴史通りには、往時の繁栄ぶりを物語る旧商家丸一本間家（国重要文化財）をはじめ、日本海の厳しい風雪にも耐え年月を重ねた石造りや木造の歴史的建築物が建ち並び、高台には戦前に建築され2011（平成23）年まで使用されていた木造校舎の旧増毛小学校などもあります。2001（平成13）年、これらの建築物は第1回北海道遺産（NPO法人北海道遺産推進協議会による選定）に選ばれ、休日には各地から多くの観光客が増毛を訪れています。増毛にはこうした文化的な地域資源とともに、豊かな海幸、銘酒、数多くの果樹園もあり、食と文化を堪能できます。



弁天町1丁目 旧増毛駅舎（現在は観光拠点）  
1921（大正10）年開通当時の様式に復元された旧駅舎



弁天町1丁目 旧増毛駅前に建ち並ぶ歴史的建造物  
「旧富田屋旅館、風待食堂（増毛町観光案内所）」



稲場町1丁目 国稀酒造「店舗外観、代表銘柄「国稀」」

旧増毛駅前に建ち並ぶ歴史的建造物を眺めながらふらりと歴史通りで歩みを進めると、風格ある建築物の国稀酒造が現われます。1882（明治15）年に呉服商を営む本間泰蔵氏がさまざまな事業展開を進めるなかで、暑寒別岳の伏流水を生かし創業した日本最北の酒蔵です。この名水と地元の酒造好適米「吟風」から誕生する銘酒には全国にファンがいます。近年、留萌ダムのトンネルで日本酒原酒の低温熟成や、クラフトビール醸造とビアホール開設にも取り組んでいます。

増毛のまちなかから暑寒別岳に向かう途中には果樹園が軒を連ねるフルーツ街道があり、暑寒別岳からの清流、水はけの良い土壌、昼夜の温度差も大きいことなどを生かして林檎、葡萄やサクランボをはじめ多くの果物が栽培されています。このほか、この沿道には増毛の林檎を発酵させてシードルを醸造するもう一つの地酒「増毛フルーツワイナリー」もあります。同社では2025（令和7）年秋に国内随一のピープルズチョイス・テイastingコンペティションであり国際的なサイダーイベントにおいて、増毛産林檎で醸造したシードル「ボム・スクレ」が銀賞を受賞しました。

取材時、旧増毛駅舎に戻る帰り道に、ルルロッソで挽いた小麦粉に、地元銘酒国稀の酒粕を混ぜて焼いた食パンをはじめ、かずの子や地元産食財にこだわったパンを販売するパン屋「スカンピン」もあります。



暑寒沢253 ヤマセン仙北果樹園「店舗外観、果樹園」



暑寒別183 増毛フルーツワイナリー「店舗外観」

畠中町3丁目 パン屋 スカンピン「酒粕本食（食パン）」

## 豊かな海幸が溢れ、温かな優しさ紡ぐ 羽幌町

羽幌町は北海道北部の日本海に面し、留萌管内のほぼ中央部に位置し、沖合に焼尻島と天売島の二つの島を有するまちです。基幹産業の漁業では甘海老をはじめ帆立、タコ、ウニなど豊富な魚種に恵まれています。例年、甘海老漁の時季を迎えると、甘海老が井ぶりを埋め尽くしご飯が見えない井飯を提供する飲食店には旬の味を求める大勢の観光客が行列をなしています。

羽幌港からフェリーに乗り1時間で渡る焼尻島は、豊かな原生林に覆われ、原生花に恵まれるとともに、潮風を受けて豊富なミネラル分を含んだ牧草を食べて育った焼尻めん羊など、豊富な資源に恵まれています。羽幌のまちなかには1965（昭和40）年創業の「緬羊工房喫茶ガロ」で、喫茶の傍ら永年にわたり焼尻めん羊で糸を紡ぎ、地元の素材を生かした草木染めや編み物の教室も行っており、「憩いの場」となっています。



羽幌町幸町57 蝦名漁業部  
「店舗口ゴマーク、甘海老丼、甘海老の各種加工品」



羽幌町南4条3丁目 緬羊工房 喫茶ガロ  
「店舗外観、店内に展示される綿羊の編み物」  
※地元企業との連携により、羽幌町で誕生した赤ちゃんに贈る焼尻めん羊の毛を用いたベビーフトンも制作しています

## 心洗われる至福の愛ランド 焼尻島

フランス沿岸地域ノルマンディー地方の観光地モン・サン・ミッシェルやピカルティ地方のソム湾では、潮風を受けミネラル分を豊富に含んだ牧草を食べ生育した子羊肉が「プレサレ（仏語：préは牧草地、saréは塩を意味する）」と呼ばれ、最高品種の羊肉としてフランスの美食家たちの舌を唸らせています。ここ焼尻島の牧場で飼育されるサフォーク種の羊も、日本海の潮風に吹かれたミネラル豊富な牧草で育ち、首都圏の有名店をはじめ、多くの腕利きの料理人たちが至高の食財として注目しています。宿泊先での夕食時、オプションメニューでサフォーク種の肉をいただくと、柔らかく口中にはんのり甘みが広がる美味しさです。

焼尻港沿岸には、かつてニシン漁で栄華を築いた網元小納家の屋敷が、焼尻の郷土史を伝える施設として公開されています。見学を通じて当時の島の暮らしや時代の変遷を見つめることができます。郷土館見学後、沿道脇にある樹のトンネルとなっている坂道を上ると、隠れ家のように静かに佇む喫茶店があり、話題豊富なアーティストのオーナーとの歓談、素敵な設えの空間でホッくり寛ぐことができました。そのお店の先にはオンコ（イチイ）をはじめ豊かな原生林が広がっており、林道散策で心が洗われるひとときを過ごせます。



焼尻字東浜183 焼尻郷土館（旧小納家）「外観」  
※島の歴史を紐解き、産業史を見つめることができます



焼尻字東浜 Cafe de Atelier おくむら「店内設え」  
※自然林近くに静かに佇む、上質な設えの隠れ家的な銘喫茶、築120年の古民家をもとに建て直された至福の空間です



焼尻字東浜160 ゲストハウスやすんでけ「外観、夕食」  
オーナーが島で採った海藻や山菜など滋味豊かな食財が並ぶ食卓



焼尻字東浜 焼尻の自然林（国指定天然記念物）  
「自然林入口の看板、オンコの奇木「竖琴の木」」



焼尻字白浜256 焼尻めん羊牧場 至高の食財生産と牧歌的な風景が、焼尻島の重要な観光資源となっている牧場

# 化石の発見から博物館文化へのつながり ーサッポロクジラを例にー

**田中 嘉寛** (たなか よしひろ)

博士(古生物学) 札幌市博物館活動センター・学芸員

北海道大学総合博物館・資料部研究員 沼田町化石館・特別学芸員

ニュージーランド、オタゴ大学でイルカ化石を研究して博士号を取得しました。2024年から札幌市博物館活動センターの学芸員として勤務し、2025年にサッポロクジラの論文を出しました。古生物学と博物館学が専門。本稿でも紹介している資料活動、研究活動、交流活動という「博物館主要機能」を結合させる活動事例とその歴史に興味を持って、博物館学の研究を行っています(田中, 2025, 2026: 末尾参照)。



## はじめに

「博物館ってなにやってんの？」

「北海道の化石はスゴイって本当？」

このような疑問を持たれたことがある方がいるかもしれません。実は、魅力的な古生物系ミュージアムが北海道にたくさんあります。今月と来月の二回にわたり、化石と博物館の魅力、そしてそれらに魅了された人々によって作られる「博物館文化」について紹介します。

## サッポロクジラと人々 発見から研究まで

さて、札幌から見つかり、2025年に新種となったばかりのサッポロクジラをご存知でしょうか。その発見から世界デビューまでに何があったのか、そしてたくさんの方の活動を支えた人々が作り出した「博物館文化」を、ひもといていきましょう(図1)。化石は、まず発見があり、発掘、クリーニング、研究、発信といった流れがあります(図2)。

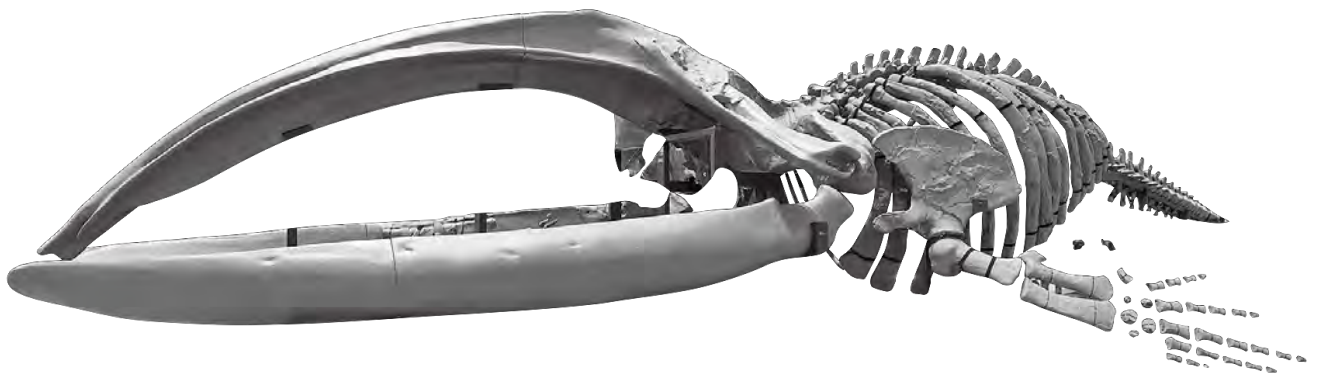


図1 2025年に新種として世界デビューしたサッポロクジラ(メガペリーナ・サッポロエンシス)の全身骨格レプリカ。なんと全長12.7mもあります

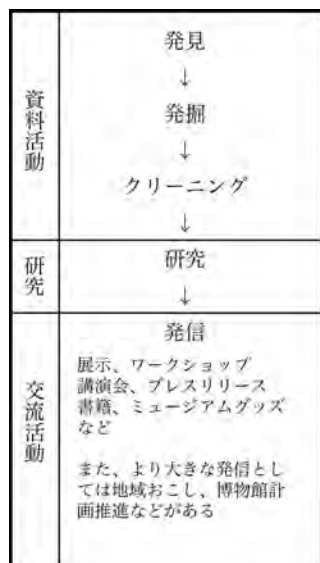


図2 化石研究の流れ（一例）



図3 サッポロクジラを発見なさった森和久氏（札幌市博物館活動センターのサッポロクジラの展示の前で）



図4 サッポロクジラを研究し、命名した古沢仁氏（札幌市博物館活動センター）

サッポロクジラは2008年に札幌市南区にある小金湯のあたりを散歩していた森和久氏によって発見されました（図3）。発見の瞬間から確信に満ちたものでした。森氏は医師であるため、骨についてよくご存知です。生き物の骨が、しかもよく見ると肋骨や背骨が河原の石のなかから少し見えています。写真だけでは骨であることが判断できないと思い、車に積んでいたドライバーをつかって取り出し、札幌市博物館活動センターに持ち込みました。札幌市博物館活動センターにはタキワカイギュウやフカガワクジラを新種として報告

した古沢仁博士がおり（図4）、即座にクジラの骨であるということがわかりました。

森氏とともに化石の発見場所へ行き、発掘をはじめました。これが2025年にサッポロクジラと名がつく、世界でもっともよい保存状態のセミクジラ科化石の物語の始まりでした。

発掘には化石発掘の経験者を含むおおよそ20代の市民があつまりました。掘れば掘るほど、新しい部分が見つかり、発掘は4年にわたりました（図5）。



図5 サッポロクジラ発掘の様子。かなり大きい岩の塊です



図6 化石の周りの岩を取り除く「クリーニング」という作業を10人以上の方々が、10年かけて行いました

発掘は骨を包んでいる岩ごとに取り上げます。そのため、発掘の後には骨だけをきれいに取り出す作業「クリーニング」が必要です。札幌市民を含め有志の方々によっておよそ10年かけてクリーニングを進めました(図6)。

その後、古沢博士と鯨類化石に詳しい木村敏之博士(群馬県立自然史博物館)らによってクジラ化石の研究が進められ、新村龍也学芸員(北海道、足寄動物化石博物館)によって3Dをつかった復元画が作られ、そして大平寛人博士(島根大学)によってクジラ化石の年代について調べられました(図7)。実におおぜいの方々が関わり、バトンをつなぐようにして、サッポロクジラが命名され、世界にむけてデビューするに至ったのです(Tanaka et al., 2025)。

### 博物館文化の原点「人々の想い」

「博物館ってなにやってんの?」という疑問に、ここまで読んでいただくと少しだけお応えできたかもしれません。これは化石に関する活動のなかの一例にすぎませんが、このような活動が幾度となくこれまで繰り返されてきたわけです。

「なるほど、そーか」と思われるかもしれませんが、ちょっと待ってください。落ち着いて考えてみましょう。このような博物館活動は、できてあたりまえではないのです。博物館の存在を知っている方がいればこそ、化石の発見の報が博物館まで届きます。また、発掘は無計画では行えません。発掘経験を持つ方々が地域を横断して発掘に協力してくださいました。さらに、クリーニングや研究には修行がいります。そして化石



図7 サッポロクジラを研究した方々と研究風景。左、新村龍也氏(足寄動物化石博物館)と復元画を描くためのパソコン。中央、木村敏之氏(群馬県立自然史博物館)と専門書の本棚。右、大平寛人氏(島根大学)と顕微鏡

は、ようやく、展示や講演会などを通じておおぜいの方々に見てもらえるようになるのです。

なにより大切なことは、一人では発見、発掘、クリーニング、研究、発信、といった一連の活動はできません。サップロクジラを通して、人同士のつながりが生まれ、お互いにより刺激を与え合う関係性が築かれていることが面白い点です。そして、なんとおおぜいの方々が、長い時間をかけて、サップロクジラを通して関わり合い、ここまで形になったものだろうと思い、しみじみします。人々の行動は経験や技術や知識はもちろんのことですが、それらの原点は「想い」だと思います。上記のような活動を引き起こす「想い」には以下のようなものがあります。

- ・見つけた化石のことを人々に伝えたい
- ・重要なものだから発掘して後世に残したい
- ・化石のクリーニング作業に夢中になる喜び
- ・自分の技量が発揮でき、社会に役立つ喜び
- ・どんなクジラなのか解き明かしたい、知りたい
- ・やっと明らかになったことを人々に発信したい
- ・私たちの地元には、このような貴重なモノがあることを展示したい

サップロクジラは化石の数としてはたった1点ですが、人々の「想い」に支えられた「活動」によって世に出てきた特別な1点であると強く感じます。これらの「活動」の結果、サップロクジラは新種として世界へデビューしたわけです。私は、おおぜいの方々の「想い」と「活動」を知り「それってすごい」と思いました。このすごさが何か考えたとき「博物館文化」という言葉が思い浮かびました。

来月は「博物館文化」について、札幌市博物館活動センターを見にいらした方々の「想い」をご紹介しますながら考えてみたいと思います。

ところで、2026年5月30日に、サップロクジラホールを札幌市博物館活動センターに開設しました。ここでは実物のサップロクジラの頭を常設展として見ることができます。サップロクジラホールはサップロクジ

ラの存在を発信することを目的としていますが「博物館文化」の存在を具体的に示すことを密かなメッセージとして込めています。「想い」をテーマとして、ここでご紹介した人々の活躍を紹介するパネルもあります。ぜひ、札幌市博物館活動センター（札幌市、豊平区）にいらしてください。

#### 引用文献

Tanaka, Y., Kimura, T., Shinmura, T., Ohira, H. and Furusawa, H., 2025: A new member of a large and archaic balaenid from the late Miocene of Sapporo, Hokkaido, Japan partly fills a gap of right whale evolution. *Palaeontologia Electronica*. p. 1–58.

田中嘉寛, 2025: 博物館の、目立たないけれど、大事なウラ側化石を中心に. 北海道博物館協会学芸員部会コラムリレー. <https://www.hk-curators.jp/archives/5815>.

田中嘉寛, 2026: 博物館主要機能の「結合」について～日本における理論の歴史～. 日本ミュージアム・マネジメント学会研究紀要.30号

## 夕張で見つける新しい自分



友成 佳奈 (ともなり かな)

千葉県浦安市出身。愛媛大学進学。2025年3月から北海道夕張市地域おこし協力隊に着任し、夕張高校魅力化コーディネーターとして活動している。

### 【きっかけは、地方への興味】

千葉県出身で夕張に住んでいるという「わざわざ夕張に？」と北海道の方に驚かれることが多かったりします。私が地域おこし協力隊として夕張市に来た理由、夕張市で取り組んでいること、夕張市に来て驚いたことなどを紹介させていただきます。

「夕張高校魅力化コーディネーター」という仕事を知ったのは、愛媛大学に通っているときにたまたま見つけた「地域みらい留学」という取り組みの説明会でした。

私自身は、比較的都会で育ったのですが、徳島県出身の両親は電車が5分や10分間隔で来るのは当たり前じゃない、田舎には学習塾があまりない、スタバなんて近くにないよ、というような話をしてくれて、地方での生活に興味を持つようになりました。都市部の大学に進学し、ずっと都会に住んでも面白くないのではないか、地方での生活や価値観にも触れてみたいと思い愛媛大学に進学しました。

進学した学部は理学部でしたが、地域活性化や関係人口創出の取り組みに興味があり、コロナ禍をきっかけに自分に合った環境を選択する、価値観を広げるという点で都市部から地方への移住について関心を持つようになりました。

地域みらい留学とは、住んでいる都道府県の枠を超えて、自分の興味関心が合った高校を選択し、高校3年間でその地域で過ごす国内進学プログラムのことです。夕張市では市内唯一の高校である夕張高校の生徒数が減少しているため、夕張高校の魅力を高め、市内外問わず中学生に選んでもらえるよう「夕張高校魅力化プロジェクト」を推進しています。このプロジェクトを推進するために夕張高校魅力化コーディネーターというポジションの地域おこし協力隊を募集していました。

大学生活のなかで都市部から地方へ行く選択肢がもう少し普通になっていいのではないかと考えていたので、この取り組みに関わってみたいと思いました。また、高校にコーディネーターを配置している自治体のなかでも、高校魅力化プロジェクトに関わる職員が夕張高校の卒業生だった夕張市に携わりたいと思い、地域おこし協力隊に応募することにしました。

### 【商品開発できる普通科高校】

夕張高校魅力化コーディネーターは夕張高校の職員室にも席があります。驚いたことのひとつが、高校の先生がものすごく生徒のことを考えているところです。生徒64名に対し教員が11名であり、生徒一人ひとりに向き合っている様子を見て小規模校の良さを感じました。

コーディネーターの業務内容は多岐にわたり、主に高校の魅力化を進める業務と、地域みらい留学の全国



JA夕張市の協力で行っているメロンの栽培学習

生徒募集があります。高校の魅力化を進める業務では、2022年度から必修化された「総合的な探究の時間」、商品開発を行う「商品開発と流通」や「課題研究」という授業にコーディネーターが参加しています。グループワークが多い授業で、その話し合いに入り助言をしたり、外部の方との連携が必要なときはその仲介役となり連絡、調整を行います。

夕張高校は普通科の高校で、2年生から大学進学コースと就職・専門学校進学コースに授業が分かれます。就職・専門学校進学コースに商品開発を行う授業があり、普通科でありながら商品開発を行うことができるのが面白い学校だと感じています。鮮度の維持が難しい夕張メロンの長期保管を行う実験をしたり、メロンジャムを使ったスイーツや、夕張市の特産品である長いもを使ったメニューなどを考案しています。何度も試作を重ねた商品がコンテストで受賞しているところを見ると、本当にうれしく思います。



収穫したメロンを使って商品を作ります

始めは、高校生にどのように話しかけるのか、碎けた話し方なのか、敬語なのか、どれくらい声をかけたらいいいのかなど迷うことばかりでした。周りの先生がどのように声をかけているか観察し、人によって違うこと、そこまで考えすぎることはないよと言っていたことがきっかけで、次第に自分のペースでやってみようと思えるようになりました。2年目になり、1年間の流れを体感できたことで、より気負わずに授業に入ったり、生徒に話しかけられるようになったと思います。

### 【夕張が合う人に、夕張のことを届けたい】

全国生徒募集に関する業務では、5月ごろから行われるオンラインでの合同説明会や、夏に行われる東京での対面合同説明会に参加しています。地域みらい留学に参画している学校は全国に191校あります。その

なかで、夕張高校の特徴をしっかりと伝えることで、夕張高校に興味を持ってもらいたいと思っています。

地元の方が自虐で夕張には何もない、夕張高校の良さはない、と言っているのを耳にしたことがあります。当たり前になっていて気が付いていないだけで、夕張高校が合う生徒も絶対にいると思っています。

私は、夕張高校の魅力である先生と生徒の距離感、少人数ならではの役割が回ってきやすく挑戦しやすい環境、普通科でも商品開発ができるカリキュラム、自然に囲まれた環境での暮らしを伝えることで、環境を変えたいと思っている中学生の選択肢のひとつに夕張高校が入ってほしいです。

そのような魅力を発信できるように、夕張高校魅力化コーディネーターのInstagramのアカウントを開設し、情報発信を始めました。高校の公式のアカウントとの差別化や、市役所のアカウントならではの難しさも感じましたが、2年目になってからは割り切って投稿できるようになりました。今は、授業の様子や、行事の準備の様子など、より素に近い日常の夕張高校の様子を発信することで、魅力を伝えたいと思っています。



@YBRHS.MIRYOKUKA.CN

### 【夕張高校魅力化コーディネーターとして折り返し】

2026年9月が3年間の任期の折り返し地点になります。任期が終わったあと、夕張に残るのか、ほかの地域で高校のコーディネーターをするのか、別の選択肢にするのかはまだ何も決めていません。大学進学で愛媛県に行ったときも、北海道に住むとは思っていませんでしたので、3年目に入ったときに自分がやりたいこと、興味があることを選ぶことができたらいなと思っています。

夕張市は新千歳空港や札幌市が近かったり、夕張メロン以外にも炭鉱遺産が残っていたりする面白いまちです。私が感じたまちの魅力と夕張高校の魅力を発信することで、一人でも多くの方に夕張高校を知ってもらいたいです。あと半分、全力で駆け抜けます！

# “引退乗用馬預かり事業の健全な発展”と “馬を架け橋とした地域振興”を目指す

特定非営利活動法人ホースタウンネットワーク

NPO法人ホースタウンネットワークは、「全国の馬事事業者、乗馬を楽しむ人たち、馬事振興に取り組む行政・団体などをつなぎ、引退乗用馬の預かり事業を促進し、それらを通じた地域の振興に寄与する」ことを目的に、2022年に設立しました。現在の主要な活動は、標茶町と民間事業者による、「馬を核とした地域振興の取り組み＝道東ホースタウンプロジェクト」の柱の1つである「引退乗用馬預かり事業」の健全な発展のためのしくみづくりや環境整備です。行政、地域の事業者（引退馬を預かる地域の牧場）、顧客（乗馬クラブなど引退馬の預託者）などの、いずれの立場からでも独立した存在として、行政及び事業者双方をサポートしながら活動を行っています。



引退馬の観察用に当法人が牧場に設置しているトレイルカメラの写真

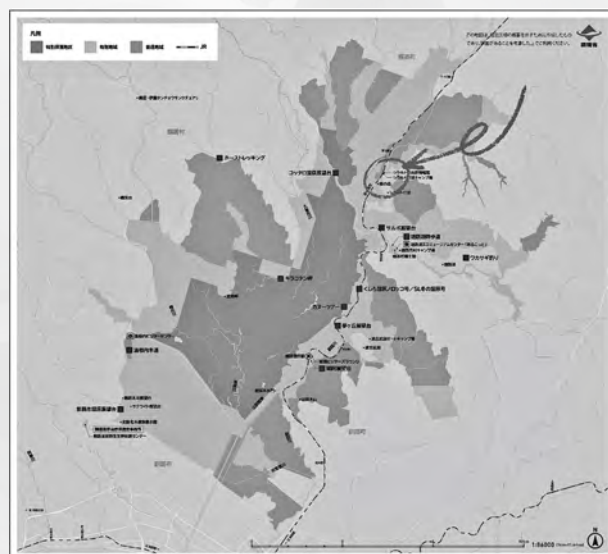
## 【馬を“架け橋”とした関係人口づくり】

「令和7年度 地域活性化活動助成」では、「地域内外協働による“馬と地域資産を活用した体験プログラム”開発」をテーマに、申請をさせていただきました。「引退乗用馬預かり事業」は、乗馬クラブなどを引退した乗用馬を標茶町の牧場に預託してもらうことで、牧場にとっては預託料を安定的に得る事業となり、町にとっては、馬をきっかけとした来訪者が増えること（＝関係人口の増加）を目指すものです。当法人として、そういった関係人口増加につながる活動にもより積極的に関わっていくことを目指しており、今回の申請はそのトライアル的な位置づけのものでした。

「道東ホースタウンプロジェクト」では、かねてより、乗用馬生産の歴史のある道東地域で、“馬”と釧路湿原や釧路川などを組み合わせ、当地域ならではの魅力づくりに取り組んで来ており、その一環として、釧路湿原国立公園内（標茶町茅沼地域「蝶の森」）での「体験プログラム」開発を進めていました。その開発に、当法人が連携している都市圏の乗馬クラブの会員に顧客モニターとして参加してもらい、“外部視点”“顧客視点”での評価・助言を得ると共に、「地域人材と外部人材の交流機会」としても位置づけ、継続的な関係づくり～連携の枠組み化も目指す企画です。

## 【国立公園内を馬と。地域内外の多様な協業】

今回の、標茶町茅沼地区「蝶の森」でのホーストレッキングコース開発は、国立公園内での取り組みのため、環境省とも連携しつつ、環境負荷を評価しながら進める必要があります。①実行計画立案～②事前のコース確認～③コーステスト～④関係者での総括～⑤今後の方向性合意～⑥プログラム完成というステップでの進行となりました。当法人は、①～⑥のステップ全般へ参画しつつ、③コーステストにおける顧客視点の組み込みをメインとして推進しました。



釧路湿原国立公園内のホーストレッキングコース（地図出典：環境省）

半年以上の準備期間を経て、11月に、地域行政（標茶町）・環境省・事業者・顧客モニター（乗馬クラブ会員）参加のもと、コーステストの実施に至りました。参加者全員が乗馬ならびに徒歩でコースを周り、それぞれの視点（安全評価・環境評価・顧客評価・運営評価）での評価確認や懸念点の洗い出しを行いました。

結果として、「安全評価」「環境評価」「顧客評価」いずれも良好な結果となり、運営面での要件や課題も明確にできたことで、2026年度後期より、本コースにおけるホーストレッキングサービスの一般提供を開始する方向で、全関係者での合意に至ることができました。



コースの事前確認。安全性や環境負荷などを確認しコースを設計



コーステスト後の意見交換会。多様な立場から評価や課題を明確化

## 【「インタプリテーション」の重要性】

国立公園内でのホーストレッキングコース開発の条件として、環境省との事前相談をふまえ、当初より「インタプリテーション」の組み込みを想定していました。道東地域での馬を活用した観光振興において、釧路湿原国立公園や釧路川などの地域資産の活用と自然環境保全の両立は不可欠です。単に、馬とのふれあい

や乗馬を楽しむだけでなく、地域の自然環境や歴史・文化などについての学びを、開発する側の意志として組み入れていくことが、観光開発の継続性向上につながると考えています。

コーステスト時には、ホーストレッキングコースの魅力や特長だけでなく、釧路湿原や釧路川の成り立ちや環境保全の取り組みなどもまとめたハンドブック試作版を制作し使用しましたが、学び要素の組み込みは、環境評価の重要な指標であるだけでなく、顧客評価（特に馬をフックとした顧客の付加価値）を高めることも確認できました。



ハンドブック試作版。2026年秋に正式アップ予定

## 【ネットワークを活かした地域内外の関係づくり】

「馬を活用した観光開発における、“外部視点”“顧客視点”の組み込み」には成果が大きいことが確認できました。今後も継続的に、馬を核とした地域振興活動に参画していきたいと思えます。最重要ミッションである「引退乗用馬預かり事業の健全な発展のためのしくみづくりや環境整備」を更に進めつつ、当法人の強みである“都市圏の乗馬クラブなどとのネットワーク”を活かし、今回の活動を雛形に、地域内外の人材の継続的な関係づくりにもつなげていけるように取り組んでいきます。



▶NPO法人ホースタウンネットワーク  
<https://horsetown-network.jp/>

## 令和8年度 地域活性化活動助成の選考結果

(一財) 北海道開発協会 開発調査総合研究所

(一財) 北海道開発協会では、地方版総合戦略と北海道総合開発計画の推進に寄与する地域づくりを支援するため、令和8年度地域活性化活動助成事業を行います。このため、令和8年1月下旬から道内における非営利の市民団体を対象に公募したところです。

応募のあった活動は、地域防災、関係人口、移住定住、地域イベント、観光、コミュニティ、人材育成、地域文化など、多岐にわたっていました。

このほど、これらの活動内容について、厳正な審査を行った結果、下記の5件を選考しました。

### 令和8年度 地域活性化活動助成団体及び活動内容

(五十音順)

| 団 体 名                   | 所在地  | 活動内容の概要                                                                                                                                                                   |
|-------------------------|------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| あさひかわジオパークの会            | 旭川市  | <b>【ジオツアーを通じた地域資源発信とローカルガイド育成】</b><br>地域の自然や歴史遺産を地学的知見から紐解く「ジオツアー」を通じ資源を再発掘する。ガイド体制やノウハウが不足する道内で、ツアー造成と育成を主導。価値共有や観光資源化を進め、地域の魅力発信を強化し、専門性を活かした人材育成で持続可能な地域活性化に貢献する。      |
| 一般社団法人 ウタピリカ            | 歌志内市 | <b>【地域・大学・企業の共創による関係人口創出プロジェクト】</b><br>全国最小の市・歌志内市にて、大学・企業との共創により新たな関係人口創出を目指す。炭鉱遺産を巡る「フォトテレーリング」で若年層へ訴求するほか、札幌のコーヒー店と連携した「資源地域間交流モデル」を構築。モノと心の循環を生み、持続可能な活性化モデルを確立する。    |
| 一般社団法人 SHIRAOI PROJECTS | 白老町  | <b>【みなみたとプロジェクト】</b><br>白老港第三商港区に仮設コンテナを拠点とした複合型海洋活用事業を実施する。カフェやSUP体験、漁船ツアー等、地産地消と体験を軸に多彩なプログラムを展開し、集客と地域経済への波及を検証。令和9年度以降の常設化を見据えデータ収集、及び持続可能な港湾活性化モデルを目指す。              |
| NPO法人 地域ケアコミュニティ研究所     | 札幌市  | <b>【駒岡多世代共生プロジェクト】</b><br>札幌市保養センター駒岡を舞台に、高齢者の「技」と学生・子供の「感性」を融合させ多世代共生モデルを構築。茶室キオスク等での体験や開発、販売を通じ、子供の自己肯定感向上と高齢者の生きがいを創出する。公共施設を地域のリビングと再定義し、孤立防止と健康増進を図る。                |
| NPO法人 人まち育て I & I       | 札幌市  | <b>【旧旅館の再生を通じた、都市部学生と地域を繋ぐ関係人口創出拠点の構築事業】</b><br>札幌圏の大学生と羽幌町を繋ぐ関係人口創出事業を展開。旧旅館を大学生と住民の協働でリノベーションし、交流拠点を構築する。一過性で終わらない主体的参画からIターンや定住、住民の意識変容を促し、人材還流と資源活用による持続可能な地域づくりを目指す。 |



羽ばたけ! 最北の空へ

入場  
無料

# 39TH HOKKAIDO SKY SPORTS FAIR

第39回 北海道  
スカイスポーツフェア **in 当麻**

同時開催 当麻スカイスポーツフェスタ

9.13日

開場 9:30 閉場 15:00

※熱気球は7:00より、ヘリコプターは7:30より体験搭乗。

会場 **当麻スカイパーク**

当麻町伊香牛1区石狩川河川敷

## 主なプログラム

### 体験搭乗・操縦

- 熱気球係留フライト(要予約)
- ヘリコプター体験搭乗(有料)
- パラグライダーふわり体験
- ラジコン操縦
- スポーツカイト操作

### スカイスポーツ教室

- 紙飛行機
- 竹とんぼ
- 風つくり

### 模擬競技大会

- 紙飛行機競技会
- 竹とんぼ競技会
- 風あげ競技会

### デモフライト

- モーターパラグライダー
- マイクロライトプレーン
- ラジコン
- 水上飛行機
- モーターグライダー
- スポーツカイト
- スカイダイビング

### 地上展示

- モーターグライダー
- グライダー
- モーターパラグライダー
- 水上飛行機
- マイクロライトプレーン
- 熱気球(バルーン)
- スポーツカイト
- 模型飛行機(ラジコン)
- 軽飛行機

### アトラクション

- 郷土芸能(当麻子供囃龍太鼓)
- お楽しみ抽選会(景品)
- グルメコーナー



でんすけくん



お問い合わせ先

(公社)  
**北海道スカイスポーツ協会**

〒060-0061 札幌市中央区南1条西4丁目16-2 道銀ビル別館7階

TEL 011-232-4347 FAX 011-218-5883

ホームページ <http://hospa.jp/>

【主催】(公社) 北海道スカイスポーツ協会

【協力】(一社) 当麻グライダークラブ(当麻航空協会・旭川航空協会)

【後援】国土交通省北海道開発局/北海道/当麻町/旭川市/(一財)日本航空協会

(一財)北海道開発協会/(一財)北海道河川財団/(一財)石狩川振興財団

(一社)北海道開発技術センター/(一財)北海道道路管理技術センター

(一社)寒地港湾空港技術研究センター/(公社)北海道観光機構

【協賛】(株)ドーコン/(株)北海道銀行

※当日の天候状況などにより予定を変更する場合がありますのでご了承ください。※ゴミのお持ち帰りにご協力ください。

## お知らせ

### ✎ 研究所だより ✎

観光は「裾野の広い産業」と言われます。観光客が宿泊や飲食、買い物などに使ったお金は、宿泊施設や飲食店などの観光関連事業者に加え、農業や漁業、食品加工業、運輸業、各種サービス業など幅広い産業へと波及していきます。こうした消費の連鎖は地域の雇用や所得を生み、地域経済を支える力となっています。一方で、地域住民の中には「観光客が増えても、自分たちの暮らしへの恩恵を感じない」という声もあります。さらに近年は、オーバーツーリズムによる混雑やマナー問題など、住民生活への影響も課題となっています。こうした中、観光が地域住民に歓迎されるためには、経済効果だけでなく、住民の暮らしに役立つ仕組みが必要です。その一つとして注目されているのが、観光と地域交通の連携です。人口減少が進む北海道の過疎地域では、バスやタクシーの維持が難しくなり、高齢者の通院や買い物にも影響が生じています。自治体ではコミュニティバスの運行やライドシェアの活用などの対策を講じていますが、抜本的な解決は容易ではありません。そこで、観光客にも地域交通を利用してもらうことで、地域交通サービスの維持・向上につなげられないかという考え方が広がっています。もし観光が地域交通を支え、住民の暮らしにも貢献できるようになれば、観光は単に経済効果を生み出すだけでなく、地域住民に感謝される産業へと進化するかもしれません。当研究所では今年度、「地域交通と観光に関する研究会」を立ち上げ、その新たな可能性について検討を進めています。(黒田)

### 国営滝野すずらん丘陵公園

8月1・8・15日(土)、2・9・16日(日)、11日(火・祝)  
たきのサマーキッズパーク

ずぶぬれ歓迎!自由に楽しめる水遊びプレイパークを開催!

- 参加費 無料(入園料・駐車料金は別途)
- 場 所 中心ゾーン カントリーハウス横芝生広場
- 時 間 10:00~15:00(14:45受付終了)
- 定 員 なし

~8月11日(火・祝)

### 滝野の森 昆虫『野外』博物館

夏は滝野の森で本気の虫さがし!生きもののいっぱいの夏は滝野の森がおおきな博物館!期間中は生きもののさがしが楽しくなる展示やシールがもらえる昆虫ビンゴなどを開催します。

- 参加費 無料(入園料・駐車料金は別途)
- 場 所 滝野の森ゾーン西エリア自然博物館
- 時 間 平日10:00~15:00、土日祝10:00~17:00
- 定 員 なし

※公園内の生きものの持ち帰りはできません。

※詳細は当公園ホームページ(URL:<http://www.takinopark.com/>)をご覧ください。滝野公園案内所(011-592-3333)までお問い合わせください。



次号から小沢信行さんの新シリーズ「北のサクラ 彩る歴史と文化」がスタートします。2027年6月号までの連載を予定しておりますので、読者の皆様におかれましては、どうぞお楽しみに!

- 「開発こうほう」へご意見・ご感想をお寄せください。

(一財)北海道開発協会広報研修出版部

〒001-0011

札幌市北区北11条西2丁目セントラル札幌北ビル

電話 011(709)5212

e-mail:pr@hkk.or.jp

- 「開発こうほう」は、北海道開発協会のホームページでもご覧になれます。

- (一財)北海道開発協会では、賛助会員を募集しています。詳しくは、ホームページをご覧ください。

開発こうほう 第756号 令和8年8月1日発行

発行 (一財)北海道開発協会

印刷 (株)須田製版 不許複製

<https://www.hkk.or.jp/>



【新発寒事業所】

## 業 務 内 容

- 土木工事全般
- 道路維持管理業務
- TVカメラ調査・管更生
- 除排雪業務
- 排水構造物清掃
- 産廃物収集運搬及び中間処理

 HRM HOLDINGS GROUP

# HRM 北海道ロードメンテナンス株式会社

HOKKAIDO ROAD MAINTENANCE

|           |           |                         |                    |                    |
|-----------|-----------|-------------------------|--------------------|--------------------|
| 本 社       | 〒060-0031 | 札幌市中央区北 1 条東12丁目22番地48  | TEL (011) 241-1692 | FAX (011) 241-7774 |
| 真駒内事業所    | 〒005-0861 | 札幌市南区真駒内52番地            | TEL (011) 592-6512 | FAX (011) 594-2258 |
| 発 寒 事 業 所 | 〒063-0835 | 札幌市西区発寒15条12丁目 1 -25    | TEL (011) 665-3259 | FAX (011) 665-8447 |
| 八 軒 事 業 所 | 〒063-0849 | 札幌市西区八軒 9 条西 9 丁目 1 -31 | TEL (011) 676-9810 | FAX (011) 676-9820 |
| 北 見 事 業 所 | 〒099-0878 | 北見市東相内町110番17           | TEL (0157) 36-9811 | FAX (0157) 36-9812 |



[h-rm.co.jp/](http://h-rm.co.jp/)



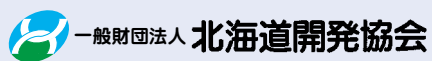
## 地図に残る仕事。®



大成建設グループ

大成建設 大成ロテック 大成有楽不動産 大成ユーレック 大成設備  
成和リニューアルワークス 大成有楽不動産販売 大成建設ハウジング 佐藤秀 他





〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目セントラル札幌北ビル  
TEL (代表) 011-709-5211